12
881
34

藤裏葉

巻名　案　此詞哥にも詞にも時よくはらとはく藤乃
うらはのともし詞つりを依り源氏卅九歳の三月
より十月迄と見えたり梅枝巻と同年也　細同
はいそまて乃程也　案　明石姫君四月に入内有へきとの
用意のことをいへり　細　はかなきさの事也
宰相中将ハあなかちふかく思ひしきゆちをするを
案　夕霧ハ雲井雁のことにんを思ひしまてあめ
くちたる心也　細　雲井雁のこと也
名月をあ中く　細　夕暮乃ん中也あらうちにやさえゆ
思し紛の人をと思ふしく年内大臣のまゝより思ひ
折やうき花くれとも
我もあゝし思ひ程さそうしけるかちよめうゑをさる

え　宗　夕霧をみても内府へ雲井の事をとの給ひてさう
候ても御ゆるしあるとやうにつまるすの給ひぬよしきこえ
あらしたらう給ふきかや
やさしき事とおもふらも給ぬるなりしきに思ふらんと給ふる
ところなりし

古　人さしもあらぬよしを聞給へはさもとうちも給はん
宗　内府を関守（セキモリ）にたとへあらり
おもしくなくへいたらくぬきはまかんなそへんも給んとするを
とるよしをいひらしれ給ふ　花　我かくとるを思ひてもして
人のなをしやうみとうまつ給ふたるへし　宗　内府の心に
そやうらり給ふとハ夕霧此頃（キ）なへきことにてもさうひ
出さしもねんし給ふんくるしもをいひられ給ふとや
女も又をとこのすめ給ふしととのまもちとものも侍らは

何のあそらしはとあきらしうておやしく　宗　たゝ大臣のつらさ
中務宮なとへ夕霧を我婿かとおもひせんとのうちに
給ひしうしとも内府の雲井を御事かなき給ひしくをを
さも給んや　細　梅つほハ后又内大臣の御ひとりむすめ也
うもれたるにさせられたる　宗　ん人をしらひをかなひあらし
両をそのむきうくとや
たゝまろ悪あり　宗　夕霧も雲井わたとの御仲よきの悪也
河海抄　力こそ此神しまさしたるとちかひハ我かくさ悪とそれはらる悪まれまれ
ねとらこともさてそれにまよう給ひてとしきをうくぬまおほしまつる
ひとく　宗　内府のるやをもなくぬとへんつらく夕霧のことも前
前の給ひしとおもへいさやうにの給ひうくもいかゝせんや
なけきんのうちよりなるとや
彼宮よりもさやうに思ひたちもて給ふなるとらくけいしつまあお。

まひつらんほとへの心見るらう　宗　中将宮の夕霧

と辞（台）みとの給ひしとめ給ひつ給てひとの内府の心也

わうさうとへ海みとも人へのうち思ひとの心ろくしさて

とやまうらん　細　夕霧と東（トキ）とてへは雲ゐの雁の思ひ

おもうへしる也

思ふともれとうちくの心とはやまりもよるにあへへ

しとくまれうりて　細　薪は夕霧密通（ミツツウ）のこと也　宗　世に

ありと世のゆるさぬ也ゆるしとうちくの心とわかまりとけう

あそとまもり侍へきとかあり也おほけなし　細　内大臣の心

宗　内府の夕霧はまもりて世に人のゆるさむとおもひ給

つよう忍ひとも

うへを侍るてうしとおはし中なれハ　細　内大臣と夕霧

とも親眼あるに惜ある也　宗　内府と夕霧比下の心を思

あらうらはるゝにおもへるをおもひ給へにしるも

ゆるさすへきひとをいふをおもひとくちてなとく

しりてなきんとも人の思ひむ所とあるけれるなとく

志てらんほのめかしへ　ことるとおもひもとに　ゆるさるゝ

宗　不意（フイ）也　与篭（トフ）の心也

三月廿日おほ殿の大宮の御忌日にて　宗　内府母宮也

案は四月とありしたり細に相違（サウイ）也　但三月廿日とは

是は七月に除服すれとも吉日をえらひ八月とあるに

あるらんとも也　弁　大宮の御忌三月崩奏は四月とあるにより

去年三月と云り　如何　八月の除服八日つゐてはしるした

よりての心にあるも也　又十月の服ハ七月とはおなし心也　追闕（ツヰキ）

愚案（カキニ）云大宮の御忌日三月也　葵巻に卯月と勘（カンカヘ）あるハ

誤（アヤマリ）也　除服正月也　愚今（クユ）案　極服（キヤウフク）ハ何ケ月といふ事も見えず

日數とハいふ假寧令三月廿日の三日ありて五ヶ月ある服
百五十日とかぞへしに八月の十九廿日ハ百五十日にあたるへし
し歟河（タウシ）と所用め此條とも三日數以後ハ軽服あるまり
重服（ギウフク）ハ三ヶ月うちハ三日とも過ぎて軽服中にも用ゐる令
の文なる也と此葉巻八月十三日より除服ハ百五十日
ゆうちをもこし引あまりて除服なるへし是又自死
なるにつきて此義今もちゐるゝ也除服過行の後也
或ハ若（モレ）桐遺（サウイ）気仍作之　細　蘭省三條大宮の三月
とありけれバとやもちかくなんしたり　頭弁　細同
ふく跡く寺にまうでて跡へかへるたち皆ひきつれいそぎ
けるまゝりくらもちかめるとも跡まゝ東りけとも跡へ
ふたに寧桐中ぬたさくあらひはとふよそほしくてか
さらなるとゝいへいつきたるたにあらひゆきてとりは

つゐ絶てたえぬ人の跡にさなり　集　深草帝ハ昭宣公（セウセンコウ）
建立の寺也藤家の極楽（ゴクラク）寺なるゆへに内府をも是跡と
あるへし　細　傳に摂家の墓所也古今にかくさる
山煙となりてやよめるも此所也是と内大臣兼経あ
なるや極楽寺
此句ともハ世もや思ひ出て跡ひしくなるを見んしなるとも
つひぞよまそとむとうしなくしまてきつめてましく跡
と　細　雲なるのはとゆへ夕雲のかくちるをまさるや　集　夕
雲のけしきといへるなるべし
なとくもはかりハめぐるは跡ことなきと跡るも六条院の跡も
せさるを跡つきさいあめることを見まして　集　内府の所此
家ハ代々て是れとく寺あむとひ跡とや
よろ門をとゞまりて表ハいとあるんつきまろ跡なるを

てまうてゝ給ふと　細　外祖母（ハヽカタノヲホハ）の御忌日なれはなり、

花はみなちりみたれ霞たと〳〵しきに　宗　三月廿日のこ

ろ源卅九歳也

むかしおほし出てなまめかしくうそふきなかめ

給ふ宰相も哀なる夕のけしきにいとゝうちしめりて

あまけありと人〳〵のさはくになをなかめいりてゐ給へり

宗　大宮なとの事とも思ひ出給也

心ときめきに見給ふことやありけむ袖をひきよせて

細　夕霧のさまをみれは給ふ〳〵しさみんとうめ給ふとや　弄　内府

の下まて心あるによりて夕霧に縁をかくおほしたる也

宗　内府の雲居雁の事をおもひそめさせ給ふによりて夕霧

をさゆるにはゝかりをひくや

なとかいとこよなくはかんし給へる　宗　夕霧ハ何とて内府

とかくかうし給ふとや　細　内大臣の詞　河　孝事（カウジ）

或ハ勘事（カウジ）の又（ユイ）孝辞（カウジ）とも

けふの御のりのえにしをもたつねおほさはつみゆるし給てよ

や　弄　大宮の御事給へしことゝおもはれけにや　細　祖母のゆかりと

云給へはゝゝきみとよそになし給ふそや雲井雁の

ことをおもはせて　弄　大宮の御ことを思給てきこゆへはう

ん歟へし

のこりおほくおもへる行さきをこの世におもひきえて給へるもう

らみ侍ゆへくるとの給へハ　宗　内府のうらみいくほとを

あはれとや

うちかしこまりて　細　夕霧也

すきにし御おもむけともたのみきこえさすへきさまにうけ

給はりをくこと侍りしかと　宗　夕霧の詞也是ハ大宮の詞

事也それも内府をさとのミやせをとおほせられし
とや　細　大宮乃御ためにや侍らむ内大臣とあるのミや
為さきよしの詞をとさしとや
ゆるしかれ見んきしきにたくらひしちと宗の詞
宗　内府の雲井雁をとゆるし給ふやうにたゝく心とや
んおもたしき御さ風にてかれちゝくにさしひとつの詞
ぬ　弄　人く後ゝる九折に何さ風に後るゝんをとくれたる詞
なり　細　おしもと何かうしく御詞也前にあまりを
おりとひまうちておもえ給ゝ也　是　内府夕霧詞
乃末ともいふそやありて恐給へとしさるを和
風にさそひてくるん妙也とにおまけあるりと云和
しあうさる可二吟味一之　宗　さてミてさのミ夕霧
と内府の心詞るまてもゝねん御乃式アろあま風

まちつくはるゝ御ことゝ御かた事まつりひまとたにゆかしく
是つふさひてまいれあらくもたかしさもとこ詞つしんあると
細　夕霧也内大臣ちすをかう詞ふかうと祈をひ詞かや
宗　是とハ夕霧也内府のんてと不審有てるや
よとくもふんてとなきを多る法おもうるれいもうれさてとる
まてと見くとるまのうまてとやうやと云ひおし詞
弄　世とこゝ也
ちゝ殿の弁法乃心ひれ有るしまやうのおもくもあそうる
く御用しまいりて　宗　菊子れ池乃祠也
そうれさ法つ多れいときとかなくさ法るふつきしくしう
ひとおほもた四月ついたちの御まへの藤の花いとおも
しろうさきみたれてよのつねの色ならすたゝにみす
くさんことをしきさかりなるに　宗　内府乃心也

律なるさち法　弄　七日也　花列まさるひさし所

ほとひさしくなりてうつろひゆくほとのいとゝあはれなるに

時節ねもしてさうとあり　宗　夕霧を請しけるにたる也

一日乃花の陰とハ対めんの時接待しけしと渡いとゝさ

あしハ立よりなるちんやとあり法事と云て　細　極楽寺

御ちかの也　宗　内府よりも夕霧へ乃またるも花の色を

花ハ極楽寺にてのことや

我宿の藤の色こきたそかれにたつねやハこぬ春の名残を

宗　内府の哥也上句略也　弄　春乃名残のことハ大宮の

ことをよせへしそなきと顕藤へとの下乃心あるへし

細　哥乃心は藤へとゆうしあつる哥也

けにいと面白き枝につけ給へり　宗　藤の花乃面白

といふをこれにもひつかてあしにとりつるや

給つる程つゝもんと見ゆさせてまいりてかしこまり給る

細　宗　夕霧に雲井雁をと待ちえたるにんと

ときめかし給ふとや

中〳〵に折やまとはん藤花たそかれ時のたと〳〵しくは

宗　夕霧乃返哥随（スイニ）雲井雁のことをゆるし給へかう

又もしまたとうかしきてとあれともたそかれとある

またハそハまうしてたと〳〵にさふらんとそかや

弄　雲井雁は又乃ことくくら夕霧を猶（ナヲ子キ）ゆるす哥ありゆ

るされたらは折まとふましきに中〳〵にと見ゆるき

あやとにはかやうにやすらんとや

むかりし又一勤云夕霧は返哥ハ郷黄昏（クワウコン）の時也藤よ

ありし前情（ヨヤイ）は此哥也　細　みえ文字面白私は哥は内大

臣の極ゆるしたる哥也とれうへすてハまよひはさるまし

ことことなるをとかくおもひなくゆるし給へかしとて

中々まじらひぬべきさとや

そのかみにてはわろしくこそわろしけれ　栄　夕霧の任り

隠ふすむと云へとも臆（オク）してかまはぬとや　細　夕霧

の臆してゐるとも見えすしくやはらかなるやひき

ならしてや給へとや

とかくおもへし給へと思ふと給　栄　頭中将に此方をかたると

し給へと夕霧の相伴せしめ候てくれとや

源もみてその給へハ　細　頭中将の相伴をまやへきとや

見えつゝりしき隠す男なすとてある川　細　夕霧ハ相

栄　頭中将の詞ハ辭（ニニ）醶（ミウ）とて見えしやさらへや

弁　男ハ志さうつへしとてみことをあり

源もこれ源氏へハ加くちゐんとて酒縁せさせを給ふ

栄　内府よりは文を源氏に力んをやはらくるや　細　此言給を

源へ力んをなき給や　弁　源の味方也

思ふなからあらそて押し給つるやあらん　細　源の詞雲井

為の事なるへしとや　栄　源乃詞也よくこそて流出

あれとも源ののことまさりての給ふにてそ源くの

動揺も露されとや

さやうにもいへと給ひてそいふとすしかくのきうなる

しうくともいをもとめとの給ふ　栄　孝なるらしや　細　こゝらさ

よろしきもくちうにてそあれとも大宮の教訓なし

ともいかう給ひて不孝なるしに今さひなるそ行て

孝心のいへりとや

源んおもふよもなかり給ふもある　細　遠ぬるは内大臣を

まれ給とや　栄　気は草子の地也源氏のうへを批判（ヒハン）

しておう

はしを給ふしきハ乃まへのおち常よりまさを抱りて
さらにて給ふるをさへいられるころほひなれハおそひを
むなるとすや給はんとや語　花　是ハ夕霧の源に申詞也
細　夕霧の詞思やり有てふかくいへる詞なうしきさ
宗　夕霧詞也下の心ハ淵底（エンテイ）あり行へともつきさと源氏
みえぬ此御心めきて我乃面白やうなの語也
わさなとはかりひさしれあり常なるをさかなりまのし語へとゆう
し語　宗　さゆう給出あれと源の語也
ゆうあのしんとさくいにさらうもしたしほ　細　夕霧の也
宗　夕霧乃心まし思案し語へとも下まいさしあしほとや
あさとしくそおまりさもしてうひぬめれ非参議の卯と
あまよりてちるわらんへてる二あひハよきれ　細　源の詞非参
議乃ほとくハ三位中将るとれ卯とりてあまを今ハまさ
あひのいろこき紅（ニ）梅をきさるなや　花　廿夜れらに夜是
わうき時をニ藍（アヒ）ほまこき花田ほまあさき花田也非
参議ハ二位三位乃中将るをといふ夕霧ハ之れを写
おほ中将非参議よあらしもと二ほひハおまりとわろくし
てれさこえん花田よろうへしやよの語也
四ゐさほくのらんやとそわつゆまうれんとともうにえまう
ぬほそともうして　宗　内府の浅葱へ夕霧おはしまさん
みえはくろひ語へとも玉衣ハ前まも我の子と浅き
まうさと六位をくせとてほまうしまよりて源氏のさ
やうにおほしめほれんや
ほらまかまさせてなまれ語ハわう給かさあてんはうひんえん
しうきはうしあるをそうれとすれ　宗　夕霧の源よう

此まへ〳〵給ひし御装束をはしめ人〳〵まても
ら進らるゝ也
上の命婦とりて給へり　宗　内侍の女房を給ふ
給ひて御まへにこそひ給ふとのゝる也
何かしの君たち中将をはしめて七八人うちまてかよふ
い進なまうつ進とあく知らしきたちともあれと
中将　細　源中将也
年とく人まさくまてあさやかにきよらにまつりかなり
うちうつきたるしをとありけるもおもしろきいく
後ろをあさし給ふ清らかにおもしろきもて　細　女房たちさ
まとひて
清らかなるとし給ひてあけ給ひてみすわかき女房たちとも
のそきて見給へ　宗　内侍乃出立也

いとうきくにおほえましき様人まりよういるをとこたちあり
まみくしやあさやかにめきいてゝまさるはきなるかなとこそ文
おとゝみえ給ふさまにも給へるそあはれ　弄　かゝるあかの給
宗　うへくさうにかやをはしめたる物やかさせさき肩衣と
めてたき内侍のまはすに又女房なとうと女房ともの
ろうさ給へとの給ひていうしうたやうあめ給へると也
これはたいとやうちよるはかなくあはきやうらきて
弄　源氏のうつくしさはへ　細　弄　同
みなかゝるまいらせ世中にこひもさる〳〵給　宗　源氏
見たまふる人皆らきまかるゝこと也
おほやけさまかゝる人をとらへしうちされて猶されかゝるかとありし
たちまれて　細　さもかゝるあるへき也
ちとあるまとそく　弄　世の人皆源氏をなかひきめてゝあると

まうたうてとや只と内大臣夕霧をとがめさせんとの心。
らひや　宗　源ハ大中臣のかたハうしろめたくとも也くちと
されあるまじきにや詞のあやしく桐壺（キリ三カト）の詞をまねて
きこゑとりたる也
これハ源氏のさうしもまうさせし　宗　夕霧ハ女宮も源の婿（ニナ）となる也
ん事ちかひおほしくきへよしに京へひあつさよみ御息所
左あめりあとの語ひく子御はくるひあきそ京にいめし給ふ
宗　かひくしくき出したる事と思しひかるる也　河　雄く（オト）
物まめやうにもへくしき御物かたりハきこえしそうさうして
藤の末うとをしたふり給ぬ　宗　宮たなるあとちうとの物語
ハうさくうるまちし給て藤の裏（ナウ）葉よりり給ふ也
ちよ頭の今れよの道とちく譜ぎる弄ひらる色にとにめ給
とかうぬきちも花をとみなくくうちまでてめちくめうう

うしめしら御涙ゆかうこらかし　弄　内大臣詞
此藤のひとつをたちさくまて　此藤　細流也
直衣よさ給ふ所とちんあやしくんよくてはらかれよ御供に
帰ら　宗　心なしかくめでてある事をかしきまでを藤の心
見しりうき也
拾書
甚御ふて宮くて也るれ花の松前とのことを思ひめすられ
きまたえうとあらてしきかうゆらすと生ゆへしやそうちめくえ見
給ヘうなしきあらてみなひきうきも　河　むらさきのゆかり
の色也こと　弄　紫藤女にもたとへ
月ハ御しいきまでと花のいろさたうふと見へぬ給ふさまで
あらふたんをもとめて御涙こたえうり給あそびあるよし給ふお
とく涙ともとくろふひとつ行てふるをかりしく　花弄花
もし給ひと　花　四月一日比よする見へしたり月にしてあらうず。

おほえけるに殿下の御子七日の夕月夜をとこそいふにさとし
たちゐのさうや前に光をたてるへし
細 前にをさ四月一日をあるこそ河内（カハチ）にうつく（シユク）の御法なり
されとこゝは本は七日也末に見えしめりしかり一日法といふ所
白也 孔 一日法といふとおもへかしたる所此義前紙にあり
なるへしとていつもひとつひとつやむめり 細 夕霧をかしくして斟酌（シンシヤク）
あるなり 孟 夕霧に内府の志あるてよかし給へたらと
をとうからの偏心（ヘンシン）してなほ思しくも思ひ給ふとも
思ふはとくの世にかたり給ひつるにて 細 内大臣の語 孟 内府詞
あきら夕霧は末世不相応（フサウヲウ）の文字には人とも
河内本にてこの所にくはにうのしなめるを 河 天下有識（イウシヨク）
孟 文字の心也
よろひかりぬるへとひとつて給ひきかんつかうまつる 細 家あり

とりわきて給ふとも 孟 内府を夕霧の上にひきて給ふとも
文籍にも家礼といふことあるへくやあらむし此まとしきを
よく相りしきるへきやと諫むるを 孟 文籍（フンセキ）とは書籍（シヨジヤク）也
家礼とは敬に礼をまもるといふ事史記（シキ）に専（モハラ）ある事なるへし
ありけるに内府あれかちに夕霧をとゝめ給は父にて八あれ
まとも日講（ニツコウ）経に父母（フヒシ）ニ愛（アイスル）ハ幼（イトキナキ）ニ子弟（テイ）とあり
是かの夕へし 文籍（フンセキ）は文道（ブンタウ）のことをもとにしたる儒者（ジユシヤ）の
師をさして云り 夕霧は儒者ならねは法（ハフ）父は太子
ましさとも也 河海にも漢高祖（カンカウソ）のこと具（ツフサ）にまつり太宗の
儀は高祖は臣下の太公の子也 居にて太公密（ミツ）通して高祖
をまうけたりされとも天下恵帝（コトクソ）王の位をとらむ
て位にたつ高祖は父とて臣下なれとも太公に礼儀
をさするとも家礼の字は是に出た也 花 内大臣の家

ハおやうにくあるを夕霧は家礼のうしろまもりし
さきぬと悦給ふ親も家礼と云ハ子の親をうやまふ事
あり他人なれとも子に准（ジユン）して礼をいたすをいふ今も
せうとも家礼と云事かはりあるなりしへといふに太（タイ）宗
の家令（カレイ）とも太公にとききこえとといふと云説あれともこれ
ハあまりなるにやあらむしれとし人とハ内大臣のことなれと
猶（セウ）もる親よ夕霧のことをめぐり男なれハ教訓（ケウクン）もよろしくさ
るにや家礼の濫觴（ランシヤウ）ハ史記にありといふ家令のこと
をまへてのるにハあまりにてとくしきやうに家令給ふ
私 あんせさきやうにむらむすのことぬらうしとハこの様井せられ也
弄 内大臣とうやまうへきんも官位ようでいへようそふも
文籍のとも家礼とこそすんてにとよむ事られかともよ
むまのや一動合（ニタフ）まてのめんとにきしへへもよりむへきる

ようやう一變（ヘン）せらるゝにまゐるのとしへとハ儒道（ジユダウ）の
きこえると云 花 わくとしへのみこそ 細 あまた物よみても不（フ）
詮（セン）ハ文字の礼と他人の用あるをもちいるにハ我が身に
あればなにとよりむへきさま家にもなるふしなしへ故物の
義可紀これハおほく儒者の事にそうなるや 孟 本文ハ花鳥に
おまかし出ぬれバゆるし人へ府說儒者のこと人へあるへしとこ
いふんなやまし給とうとも学問へくまなんしたとの給ふく
細 内大臣の我々もとかやまし給ふものなれとうしろ給ふも
さいわなれなやおもしき給はしきこえたる給
河石 うきよしめく物つうちハ酒のとてさへなれともうしてまさ
ゆてあるへし
びくて花をとる給へハうつる法かうろうともかえあるもまつるなり
みとめてすこし給へしやと物かとうにゝ渉給へしなれ給えとおりつ。

御らんしなすことにかはへらんもとよりおろかなる心のおこたりにこそ

はへらめ　箋　夕霧の詞也身を捨ても如何やうにもなりまゐらさんとな

おもふとハ内府ハ恨しきこゆるとも也

大宮又致仕の大臣のうちに内府へたのみきこえさせんとも

ともやと夕霧にかたられしことありハ勿論（モチロン）との心也

細　致仕大臣大宮善なるとの御ゆるしをえさせへとありとも

てくるしはかりへしふる也

許しなく　細　内大臣の時宜（ジギ）よろしきも也　箋　夕霧乃時宜よくや

許しなきの心也

ちかうくろく　花やかにきこえんもへとまて参りてうらも

やしなはるんや　細　夕霧を饗応（キヤウコウ）し給也　箋　夕霧れ

とのやうにわかされあるに時々しきこゆとてまてりや

しなとや

藤のうらはとうちすし給へる　箋　内府すし給也

細　内大臣詞

甚白きは藤なるへしそれをうちすさひて宰相の君

時ゝしきをと給りて頭中将花の色こくことにふさなかき

をりてまらうとの御さかつきにくはへ　箋　頭中将内府の息

しるしとみゆる也

とりてもてなやむにおとゝ　箋　夕霧のさかつきもてあへ

さ度あり

むらさきにかことはかけん藤の花まつよりすきてうれたけれ

とも　箋　内府のこゝろはむすめをは紫にたとへて夕霧

来臨（ライリン）あるをまちしてハ雲井の雁のゆかりとにほはして

夕霧をかこたんとも也それをとかくといひきかせとか松よ

りすくるとハ松にと藤かゝれることをいへる松に藤の縁

まらうと下れんを給はらせたり夕霧れと疑ひさせつくま。
されは紫をかことはかけんとも一説には雲井雁の数ならぬ
ゆへに夕霧と紫とそへてわか身給へとも人にしらしあらく
とも也推量の心かゝらんとも也又ふかゝる意ありと
とくかへりと紫をとそへてかゝらんとて惣ての夕霧れと
くるしきんしも何かうまてかはやハ夕霧と給へるかうち
しるまとゆへり　細　雲井雁のことを藤のしあかふると業
まうてうる也松よりすきたるといへるを松よりすきてと
をとりおもひ給ふよりもあまり我もとめ給ふほとの哉に
上て我まつまにほとへたる也
宰相さかつきをもちなからけしきはかり拝しまつ
るさまいとよしあり　宗　夕霧盃をとりて礼をする也
（細）礼をし給へる也　河　御前勧盃（カンハイ）に又官盃（サカツキ）を納云々

持りて中座に帰て盃をもちなから拝（ハイ）する也かたはらの準
拝（コ）之　花　夫盃を給りてハ座（六）にかへりて拝舞（ハイム）する也
これをさしをきけるもろハ外舅なれは礼とあるへし也
いくかへり露けき春をすくしきて花の紐とく折にあふらん
宗　夕霧返哥の心ハ夕霧れ袖の露けきてといへるを
ちくたてつるに時刻到来（タウライ）して雲井雁のひもとく
ことにあふとも也　細　何まてこの年をへつる字も花の紐を
とくハ今日のこと也続盃（ヨミ）の字にいくかへりといへる花と
ひもとつて物をひらくにたとへてまうにあふらん　河　続盃集云年
為て流息はらく人のもつものしらハ待しあつまる花の来
けうとくこゝにつらぬ奇　細　同
頭中将に給へは　宗　夕霧の盃を取中将にさす也
たをやめの袖にまかへる藤の花見る人からや色もまさらん

箋 以中納言を見も窓にまとひこゑをかなるや夜はなくなる
あやし雲井わたるの袖にまつはるかはる花は夕霧の九かへる
りんまとのまつさしんとあり 河 婦人（フミン）（カホヤメ）白楽天 牛羽安人
幻（同）帰 下乗 細 これも雲井の雁によりてひとへていふ
はまたくもんなかるめれとおもひのまゝのはなにけふらくしうら
てみよりまつさしるとて 箋 つまくれ人のかへともなへられと
と沈酔（チンスイ）のまつされかれハ此方かともかくもまさりしとも
御の前の眠をとるんとあり 細（一編）もんしあるまくやといふ 流 義
おもしろく
七日の夕待くよりけ日のまゝに池のたちんのかくにもまさる
まり 細 四月七日のうへにて見くしりつゝちはとあり
いみる上旬ほとゝいふなるへし 箋 第乃頌に四月一日とと
きく七日にいるゝとみ降誕にとおもひ日数ともとく
せて入るへし寓元一部の事といへり又一部涅槃経を一日
に七日ともにての句あるよしの経也
きくゆふさけの水のこする色とも 細 花とは池のはちすの露也
ありくしさはるたひとてさまへきたまへすよろこひさこれ
名称のさるにつきなとおもしあはぬよくれる花の積よめつる
あはれと称して見の南方にあとてよきふくかまて
箋 猿の花とも逢せつる時なり也
行うきたら 箋 蕭瑟ますゐくうきさまて 呂 僧（キン）る 実（ラ）
蕭瑟乃云六男此みなそうに女をともひとく郷のうきなと
おもひいぬるとその女乃行やまは侍らるへおりあるもと
とをあそはをつくんとするるんなり 細 河海にみ
えるも今こそゐんとう女のきてまよき女乃言をも歌
ますかめるもにならさせてうるなり也

いと尊やかなるもはべらまつるれどうちとけれ給はぬ・
河 帝範 文選 花 弁少将の時令これかれとぞみえきてらる
をみなく学の絡くなとやけうとつかすのまさるをのうちも
その読へり弟やけさは紫の字や此詞は公卿をとうく
やまとぬきをまくらなものとうくろやうへんさまやけ
きくとりくり 弄 うえ学のくさよわやと女のことをあやうかりた
名をのこにとやなしてうかやうきこと内君のはやさう
まとの詔も紫の字をもしはやとなるとのんも 細 てきあむ
あるやと内大臣の絡也
やかさにあるこれ紫の字のとうちさうへ給へる御色いとおもと
しろく打ちき宿をかへてやとうしき所おもうひたて紀思
ひのうしさてありぬめり 細 花あるとしろあるを弁御か
けるを展轉（テンテン）書写（シヨシヤ）の誤（アヤマリ）とぞ 此義いかで思ひとも用ゐ

くつくらひ読ありへし 是と緑云乃席（セキ）をれはとうはう絡
あらぬるとなんはうひあるへきさもとらるとを弁の将あと
用ゐなくて何もれはまてにうすくへきとおほして内大臣
うにうちとくろへぬうるひく読あるか如へし これことと
まにくさらにはつものるや毛詩（モウシ）なとうくかすも漢家（カンカ）に
此例おほし文選なるとに毛詩の詩尚書（シヤウシヨ）乃詞不可志
たるひ用ゐ志るうひとく文字讀なとあくぬさ毎に用
ゐるかことめつしくさうちとも也ゆめく云字（シヨシヤ）の誤（アヤマリ）と
八かんうへらは 孫 信るもうさところあるやとありそへ
家のおもむきかれあらうしや納言云誤たるやと花よ御師
説一義あり此物語古注をとうへく附は隨（ハクカツ）くなるこ
ところもたしとおもさうへあるらるへしとの打あ節は
またるなきとうのも八年ほどに古なるやを紹ありて面白かるへし・

花
芦垣の哥の詞にも年へにけるかと云詞ハなし。とゝろ
けるこの家とうたふを例の展轉(テン)してかへとに
とゝろけるを年へにけるかと云ちすさむも故ま年
へにけるかと背むとも云そへてとゝろけるかとも
へきやとゝろけるかた家乃おもちあれ亀くとも云や
宗
うらひ地の神にもとゝろけるかもあり志らうるに仰の式
かゝと程くハ浪家のところちなれハ年つまあるに此家の
とうあるまやとうつりとところあるかと云んとも家のあれお
ちつれありんもこうに色とうらふ内府の卑下の心也
まうしと知らく年かねうるひ出ぬと内府乃御へきと
云それもるも弁か侍らうふかんとも内府ハ夕霧ふ年
おもりての結ひぬ所ま雅の雲ゐ名のことをおもひ
てと程くハ夕霧ハとうとあるそと云んてまうぶ

やまんかま内府の同しく頭も此うらハ地のんそのんお
やうしや年ろこに有るをも花のみえ式ア選てうある
かとあり師説にハ御心のんはうひまつるにてをして
云うも毎文めせおつて云うゆるの例のうも
藤の花おもしと齊ハ志らうしかと云うふ勤(タゝト)まや
西うく夜の中をゆく頃とにつてうゑうやまとしてきうく
ちつとさへうさくて　宗　夕霧そら酔(エヒ)すうなけきも
まうそんうくも頃とくしうてそ侍めへされ　宗　おもとくし
こさんも又おそうしきやと云んもあり　河　拾遺　読(十ケキ)人
いかしのとのくえうの頃とくしうとも名ふまたにそるされ
花
拾遺(シフイ)の哥頃とくしうとも如ふけるふの頃とくしきを
もとうしきるかと云やうならんもこのむとうしうれ
拾遺の今一首の宮作の心さの心ゝされておの名とかと。

おとしかめとも力なくしれと云ん也さましハおとなしくし

きと云ん也さや猶もかきあるほとに后の字とおそ

ろしかへき心よ宰相中将のいろ〳〵ありし司ハ一定（チヤウ）

せらるへしとおもふによりて可申なり也

とのゐ所ゆるされ給てんやと中将よろこひ給ふ　宗　頭中将の

とかめ給を猶ゆるされ給へと夕霧のさまてその給也

おもはんや比中もまたとめよ何をいふとかひなく

ミて　細　おもしろく頭中将をさしての給也　宗　少夕霧の注申を

かん流をとめて弟しせすと頭中将よの給也　頼臣

むしろいかれてまよひぬともいひきていひ給ぬ　むしろハ

宗　内府乃ふれあるとの詞也

中将花のいろを種よんにそやかるしきなる人ハそ給ふ

やと心えて　花のいろを乃ふ君也　細　はくとある也と云ん也

内大臣のゆるし給ふをとそり　宗　頭中将の思はへ也くへし

かくれらんとやんをせる所のかしくへのきたくへ也ける也

松よちのされるハけしきなる花とかし　細　面白き返歌也

弄　常盤なる松よちるさえる花ぬれとよのうちとて花ハ咲ける

別ちるとえハおもかん比侍の字にいまくへ又役をまかんすてとも

背くへし　宗　夕霧九詞也松よちまされる夕しいまさくハ多たれ

とるかう下のかんさ給の字のかんや夕霧の内府よあまのちへまき

らまて答れとうききあるかうてハちらえて頭中将お目

ほかあらす給ふとや

ゆるしやとせめ給　宗　やうまへしやと云ん也

中将ハ心のうちに猶そのとかやとそふ不有あれと　細　頭中将

我かよのまけあつよとねよくそひ給也　弄　頭中将也夕

霧のいかにもとなゐしハあれしなとと給ふ

人のけしき給ふ事をとめてたまふよ　栄　夕霧のことをいふ也
かうもありなんと心をかろゝかなれはうしろめたく
思ひ給ひけり　栄　めのと常に聞も可然と云心みゆるさるあれハ
心中もくやしと思ふ人の心也
おもとこ云ハ身分と知らし知らすとも　細　夕霧也
わかきいとくいつくしうそおほし知りけんし　細　雄謨（カミ）思志する
ことと云義也　栄　雲井雁の心ち給ふとの儀也
女ハいとゝつゝしむ心にして物し給も給ひ出されたる人
はりさ海いとくおろぬ所なくめ中もし　給ひまうさまうと
ありけさし　河　夕霧のつかや雲井雁の心也
世のきこめしかも給ぬへうちうるみとんもてなそかくまても
あ給し様ろさるめれ　細　夕霧の詞　孫　引きありけん遺れ
理（コトハリ）もても当し侍り　栄　夕霧の詞也心ハ内大臣かたく

我をとらひ給へとも得ぬかせ我うらくにまとろく堪悪
しよろんふそて内大臣もゆるし給へと云也
恋（ほ）もうに志あらきとハさらかるも世のきこめしかも給ぬへきか
はられと志ふ給ぬもさ海てとなるわきさられとうしと当し
給　栄　雲井雁をかくち給詞也
おぬのをこらしはるおしきこれおほむしき八　栄　償る楽
のちをひ給よおやうるまかうよしとまうしたもありし夕霧よ
つ内大臣まゆてと親てに来れるやうに弁おおゆうう
をひろしぬうそ気食也我色やさに内大臣よるとても
よろて彼待りとに来りうれと云心也
見てとめ給つや　栄　夕霧の詞也雲居雁ハ内給ふうとも
つるきぬしろく　栄　弁おおいつくきしれとふ心也
（花）くるゝを人のれといつふ心也ぬし八弁おゐとを云也

弄 いてまさいらとくしきやぬしかれとハおねのことは前におもや。
にや雲居雁おまし前座の気合に夕霧の役仕たるに
中絶しとのやうにもひありされと夕霧の心よりに
そや思ひつるれ如しうちとの詞つ 細 いつくしく云た
るへきなりや 孔 おねのうちひしるや
川口のとてそはしつ人まうしかまつれとの詞へハ 萬 川は借る
架加波久知乃世支乃安良可岐也世支乃安良可支也
末毛礼ともまもれともいてゝぬやいそてまね
ぬやせきのあらかき 内府のまもりを詞つれとも我ハ古
おや旅うちしよし夕霧かるゝひたくちとしとめ 河 云に川
口のせきなれあらけをするれとといて我ねぬものかくに
とれんハ若垣の難うさるて夕霧れるハおやよまうし
とあるを夕霧関のあらかきまもれともいてゝ我寝ぬや

とてそつき海ほしかきつれと若とゆきましあるやそれと
女のきるゝやとあられるや 花 弁 おねのあらかきとう
らひ 河 夕霧ハ我を川口の守と云巻にうるひとくさ
しを女あしかるを詞と出ぬるしとあるは関のあら
かきはかたくまもるとも出ひくあきんと出かうそ
しきうちしとおやたちいきうち詞うそとうしめあるやう
よふ詞つるとつふふまれハ女いさゝくるしやとある也
弄 夕霧のへさやらみをあらしそ雲居雁のことハ親のお
とゝはまもりかくともつゐによをおやれる
ようしまもそて河をしてまぬとつそまかりうきとや
細 河海花鳥若我とも云とうかやいろふまもり詞
つゝもはなみそしまそてゆかしき詞にとあるかやうり
面代のをまよかるへきや

きくうちしきあはれして　宗　雲ゐ雁ハ夕霧のおやのこと也

おもはぬとききつくしくいひ給ふ也

浅き名をいひ流しける川口はいかゝもらしゝせきのあらかき

雲ゐ雁の事をもらしゝと今浅き名の事はいかにさ様にも

らし給ふそと也　宗　心ハ夕霧ハ内府のもらしたるとやうに

いひおとし給ふハ内府の御心よりいひもらし給ふにやさるれは

ハさやうの給ひをよそにいふましとしといへる

也藤葉ハ内府の名をと夕霧のあさくいひちらし給ふを

いかにも内府のそらさまかことゝいへるさまなりひまう

しあるそと也夕霧ハいまぬと云へる雲ゐ雁の

よし給ふ也川口関催馬楽といへり

抄　あさき名とは雲井雁の御事のことを夕霧の浅くい

ひろし給ふといひてもらしゝハ夕霧の御事ハ

ひろめし給ふ事也関ハさもあらぬ御事也これはまたといへる

事をとふ人ハあやまりと又いひくもらしたるといへるそ云れ

浅きと夕霧のきゝしらぬいひたてまつるんといひて

とらしたまへんとおほしめしける

抄　雲ゐ雁父大臣の事を夕霧の浅くいひちらし給ふと

也又こゝろもとをさなまてと云給ふや関ハまも

名も給ふりそれならまゝといふることを浅きにてよめる

河口ましとの給ふさ　花　夕霧の内府のことをおしき

さ様まの給と此雲井雁乃御祢と云り

いとこめき給へり　細　たやうなる也ほめたる也　宗　こゝまやう

にうれしうちも又おさなきくちうちなるかまたまよ

うちていひと

もくうちひそく　宗　夕霧のさ様也

まことにあるまじくたの実と川口ハ浅き心のこハ相見事をゆるしなん
宗　夕霧に逢奥列（アウレツ）菊田（キクタ）関（セキ）のまよふ所ふかく内府乃
まま事も終へをもつるまてハ内府のこころをまけてま
称き路へしと作あるかたとおもひれをかつもまうかく
まかりあるやうにいひなす路に并かぬのんきいふまれ
ぬともや我浅きのこにきを相見を路ひそと云へやりひ
相ともまた我にあり待られうたのんや　河　菊田関（立奥列往）
同奇指（八雲抄河内とく）　花　と業男の返事ハかくくまある世ふ
奥列乃くきまれ関をもとのつらしへハ河るあれ
川口乃実よのこ浅きと云ふともおもひを作るへきと
いふる也　并　きくた同しくきこの関ハ奥列くききれ
実ハかくくまある所や　雲実ハまゝをし出るまとをある
相（ナラヒ）也そ程あされハ見をも浅くいふハあはしあるふくあり

あをと谷あるまき也又花なる又河しうきれ寺乃んとを
とふして又し路へをやまくとして両日まも也おもねう
さひくんを夕霧れ女乃親又偏にしもしとかくをて
とらひしと夕霧の関乃河しらき世の路しと女是れ
浅きこ見をもまらし弟うを指てよめるや夕霧又かき
くまある所ものよふ程あるあさきこころをかは旅路
あると谷路也　細　きふくまのある実也されもまあるに
ハある絶さぬれも浅きことのこととするふそてハ大きまや
孔　くさこの関を内府の方へ立まろへ門口を独角に江
しあるや
其月つはまりもいとくるとあらしてちやまのしきに
宗　夕霧れん又相許也
相おほしきをつきひまかくちてくるしきにまてあらしく

こゝちして　宗　ことつきてや

御ありさまのかはりけり　河　むかしされけるもあらはね

し物を着るとも見えしとおもひなるさまにや

人々いかにいひしぬと　宗　女房たちなるとハたや御めのとに

御ゆかしくなるといふ也

おもしろくかきたる河さいそれともかくゆるかな　宗　おもしろき

ハまつくに聞きてまるとて云也　河さいハ哥猶のよし也

されともかくてこそ出給　宗　おもしろく此御とものとゆるか給へ

御あそびとて夕霧れはまさとひ給ふとも　花　おほしさし

てそ退出（タイシュツ）のよ也　細　おもしろき　給ふしもえそ依

退出のやうにあるとも何

給ふされの夕霧河さき見るかひあるらし　宗　雲井雁の

さ侍といふ也

河六帖

給はれるあさかほ此花社寄に折まししつ見ともあかね君かれ

花　云此哥ハ花ちるとも人の折のかはりなきたるにや

弄　夕霧也そうな

清水に花便思ひあまりつる後さ此人はいひまて有を

細　まことの志とくいまさら思ひ給ふや　宗同

御いとをしハいふやうな給ひねとおもひかけぬきさらちつきし

ゐるまかとも給ひあてて見給ふまていとらうなるにや

宗　夕霧人のあそまいらせ給ひに雲居雁かハよし給ハ

ぬとや　花　出ける後思ひいくまは夕よりひハ有とと云

ハ中しくそてるをもほうてもあくともえいかなる給ひて

称（イサヽカ）とえてつるしやおもひたる後達（ゴダチ）るとハはかなし

ろひとつ見にしもあるや　弄　雲井雁と給ハいとうく

し給ふなと兵（ウラ）みや　細　思ひ給ふ時なるなとも云ふ中

中なるまとゝし給ひけるかとのたまひ給ふや
はきせたりつる涙のしきりにのたまひたる名乃御袖の
宗 夕霧乃文ニ云や女のうちうちまたりしおとゞうらみて
いふるや 弁 女乃心のうきぬや 細 夕霧の詞はまことなる
まつりけるや
思へぬかけてなきぬへきと 宗 此ふる八付ともしてあひまま
らて心に思ひ給しうとう給をぞいとゞ涙へきんふや
花 たへぬ心をさへかくさに又思ひきゆへきをうらむるかとや
弁 心葉のしはつくしにくるや 花 心葉のしはつくしにくらん
いかゞ又さらしぬへきとや
そらむなしきのひまなかりけるてをたゆたふ涙ふりかゝる袖乃雫を
宗 夕霧弁心ハ日比思ひしをめうて袖ハほしもやらぬ涙斗る
名におきさハ又おひみゆるもんましきに又程もなき雲の跡

のうらにとまりぬらんまの心ゆへにぬるゝ思ひや行方もしらぬや
うしぬる袖そ思ひもしらむなれとや又なにはつらうつりに思ひは
此乃ねまて思ひつらうとももきてけりつゝぬれとるらんや
花 此年月ハ思ひよそ袖をぬらししをも給りにしたゆ
さにうちとけハ涙の露をとのつゆにけりふる露を
なからめうかゝりまきたまは今あきハへめとなくつましき
さら思ひ給り 細 とかくハ思ひまいさきそとや
花 夕霧此年月ハ思ひおもひし涙のなきをゆきなれて
うちまつもとて余まりけるつ袖乃上をしのかな
めそ思ひや
なとかとるれ乃かりうち見えてまたいつくもなき
あらまてにあるられとの給へしも若れ見ゆるし
花 これとおとくれ詞や文のうちれ詞まかりまとつまり給ひて

手跡をほめ給ふそおかしくたれもかゝる御筆なし

とハ此けはひうしきを露ものこらぬとゆふや　細　内大臣

手跡をくらへし給ふや

清書しいとゞそこらまされるとみえてさらに見し

さくら色のぬへきをとゝめられしも　宗　内府のこゝろおほしまさハ

清書して何そたしかくされしにや

まさる給ひぬ清はらひの涙くもまへくあらしぬさほまして給

へり　宗　内府雲井雁よりも御給也

中将おもふきはゝきまてあし給ふはひとゝいひさかなし

つかひなるへありさし清はらひなむもおもくちるとひとく

しくなるまゝなめり　宗　夕霧よりも使ゐたと源中将あひ

てうしひ給へ清さや

おとこのせうたなる人のむつましくおほしつゝひ給ふなりけり

六条の御かくもかくやさしくめしてあり宰相は〇よう

もひろきそひく　河　右近将監つまさ叙爵せさるをとせせ

うれしう也　弄　夕霧右中将也右近将監なるへき

あたまても思ひ合(グ)葉たちをしらるへし　宗　夕霧かれ

給ひも惟光か子たちをたのむやとそ

ゑりらぬ給へをはらからまうても給ふて　宗　夕霧源氏へ参給也

あさいいみかきとものしつや　細　源の絹　宗　夕霧なり

雲井雁の方へ人々はゝかられぬるかと源思給也

さうしきんも女のことくちるはいるることとめしおるとへかろ

うらつらひんへきもてもくされぬるをむ　河　寛平

職左大将藤原朝臣ハ左功臣後其年隠家已競段

理元年於女事有不失　宗　源の夕霧をほめ給詞也

もしくよぬきたてある清心をおほしける　宗　人ゆるく

くつしひんかうまでぬとぬきらてあるへしとなり。

細なり

おとこのこともさてのあまりもくみえてあさうるさまなく川

をとこ給ぬるをよくへもいひつゝまかへんや　案　源細内府

の論りにあらしくしくて今ハ二れ兄弟もありくる

弘徽殿へやあしうれありやこと世の人のあつかひんとも

給りとてもわりかきさうへいひかねんおもふなしても

きくしきんちへあるとも〳〵し給る　案　内府のまま給ふ

を夕霧おもふさまとおもひつゝかうて内府のこゝろひとつを

給ふると〳〵給ふこのんおもひ〳〵し給ふとや

さしておもひくたいはさなるへんとさてやかんやさとと

このんちへおほし〳〵す　案　内府のんふとおほやうに大宮

色こゝろとかんやきとも下ぬんハ女く〳〵しきとやそれなとおく

しゝくぬくをおりや源の給へり

くるとりてへ分んしみてきあつき給へるへやるとまいのとし

色このましく給〳〵せ　案　物く〳〵給りもこるへしとや

ちとうちあひめやもとき浮行りひともおほさる　案　源と夕霧

との中なひさしとらへり

浮まとも兄へるをとこしうこ兄弟とさるとみてかへく給はうくに

てハおるしつかをとりつしろうと角ろかたまゆるを　案　源の浮う

たちハ夕霧にいさ〳〵の兄れやうにとく〳〵かんと給ふとや

おまへみ〳〵ハ浮まく〳〵あるみてるとかんと給へり　案　源の浮

前すてハ夕霧れうちしくにめてるれとうくにかんと給ふとや

よるてみく〳〵ハ源氏やらん又夕霧なかんとおもふしうる

まつされ〳〵しとや

おとくハうきとにきとあるとし　細　このうすれや　案　藤花のゑ。

とくやうくめきくあるこゝハ唐綺（カラアヤ）乃ゑや源氏卅九葉

花　しろきはそへハうすきぬのきぬや

しろき袷それうしめ紀あるらめん為さやうにはやくとすれ

あるをきまりてあとつきさせんわてにあまゆるしうありしま

も　細　直衣（ナヲシ）ようさありするなる夜也

宰相殿ハもとよりこのみし法あるうしに　宗　夕霧ハ二紀花田

や　弄　夕霧十九葉もとよりそのあらし

ちやうしその乃らうくまてしめるしろき（ニ之巻丙本）はやのあそうりこき

とき給へ　河　西宮左大臣六月の法丁子染乃帷（カタヒラ）なと著給ひ

あるよし旧記（キウキ）にみゆ　花　これあやうらしめ紀なるけてハ

あるさとこそや　細　うきぬや　宗　丁子染ハ香（カウ）色なるへし

しろきこゆや　弄花　きそのあやれ

ちと浅しめきてみんようるの也　宗　なる風流（フウリウ）なる夕霧の姿（スカタ）也

ちうん仏いてなまて法師ともくまうかれハ日暮て法かる

くよきとこ〳〵へし　宗　灌佛（クワンブツ）や仏誕生（タンジヤウ）の时のうふ湯（ユ）とも

名付るへしまく〳〵高位（カウイ）へハ導師（タウシ）のまゐせて参らる也

こゝ志仏よりも導師ハとくまくありてやや先かけし

法も日ところさて八日ようつるやうに出るものを四月八日ぬへ

しれ四月八日仏ようれ也あひもとなるとも云　花　国史（コクシ）云承和

七年四月八日請（ジヤウ）二律師（リツシ）一伝燈（デンドウ）大師位静安於（ヲイテ）二清涼殿（セイリヤウデン）一始（ハジメテ）行（ヲコナフ）二

灌仏（クワンブツ）事（ヲ）一

あるもなるとお明中もとおまりにかうつはしんくよしなりつ

推古（スイコ）天皇十四年ハ年初（ハジメテ）安（ヲク）寺（ニ）四月八日設斎（サイエス）　日本紀

灌仏乃布施（フセ）みるものハ銭を用ゐるを中はゆるところにこ

されありくまるほとも以て取りきち也　弄　親王大臣以下布

施を内裡（ダイリ）よりうくる所也

おもへのさはりとなりて見るにちかきとも心のほとびて中。
く　宗　禁中九禅と云深く内へうつさせ給ふやされハ人やまを
さまたくるほとなり
うき物ハしき法師かうちもあやしうらん法のひかりまてらし
ちかうさいおハ見けんなく心あくもはかし
よきをも結句ハ人々もんはりひとし結ておかしき結句なとや
思きはくろひく出語を　宗　夕霧の雲井隔のるく出語を見
わきとなりねと情たち語りく人ハうらめしと云ふもあはれなり
宗
態ハまつくも紙に夕霧のさひしくにふかきあはれ女房たち
なとハ稀なるかなとなり　肖　夕霧よんとうきし人宮
とや　細　夕霧へうらにはしまりなとうらめしと云人か
人々へしやや
年月のはかなきうちをへく思ひうたふる法なりしひなめきを

宗
夕霧に雲の隔ハうし月のはかなきを今又恨られつれとも
細
ことかきに夕霧かんうつくしきをいふや
なまらんや　肖　はかとてかくれかたきに心ぬらんれ
まらけしと奥し物を
肖
なまらぬとハ雲間（ウンゴ）なる奥を云也水漲不通と云詞なり
なり　和　物のちそらしとなくこそひしきことをいふ
ゆるしのかたくをいとはしき　宗　内府の夕霧をとかしう
うつき語也
ちうまきことをいくしき物におもしてやうらまてう
つき雲の語　宗　うそくみて力へうらもちかくうるそてん
きはかよくまさるをて可能ことをいう
きあやうかる法んさ海なるとの年はとんなりてるし語つる
あとをかれうらおもしゆる法　宗　夕霧れ定人すて年と。

ろはゐにうそんもなくなり給ふ方ゆるさるゝの内

府乃事也

女御の御はらからは母なるとうるさきをそれゆへにめてたくあら

まほしかれと　細　女御ハ御さいはひのかゝる御ゆへ也

宗　内府の北の方の女御に奉り給へとも名高と雲井の為と

のたまふやうに御そしりまされるとの心也　母北ハおとり給也

姫君に御かた人あるとはいふよくはとひつかへともある也

弄　女御の御母内大臣乃北のかた　細　雲井雁の継母（ケイホ）　宗　内府

の北方ハ雲井雁乃為にハ継母也されとも人くるしくなきの給

をぬやくくおもはしん也　私　雲井雁の継母也さうら

の人々こそうち睦（ムツ）ましく見給へるとおもひあへる也

あはれのあるしきこそ給へん　宗　内府乃事也

かたらひ御ためなるとそかくハいかいらへと云ひむかひたる給

あるを　宗　雲井乃実母（ジツボ）也されとも今ハ継母をこそまことしくとおもへ

ん給はくるしからぬと也　按察使（アゼチ）大納言乃北の方なるへし

かくて六条院の御いそきハ廿日あまりの程なりけり

宗　明石姫君の東宮へ参り給はんことを源ハいそき給ふ也

たいのうへみあれにまうて給とて　宗　紫上の姫君入内のた

めに御祈り社参（ミヤサン）也　みあれの日ハ祭のまへの午（ムマ）日と

いふ也　さてみあれを申（サル）日也　見物ありて賀茂祭ハ酉日を

みあれともいへり　花　紫上酉（トリ）の日の暁（アカツキ）にまうて給也　御

あれハ玉依姫（タマヨリヒメ）の別雷神（ワケイカツチノ）をうみ給ふ也　あれはうまるゝと云ふ也　御（ミ）

生（アレ）とも書　別雷をあらはし給へるゆへに御形とも書

又神鏡（カミカヽチ）ハかけたるともあやとのかたちをさへみちと云ふ

に有と云り　弄　御生所荒るゝにあり別雷の社生所

御あれの神鏡へ紫上参り給ふ也　源乃詞に見えたり

細 紫上也此時ニ紫上乃葵花の盛也其紫上をうるとハ思
ゝりの前也　私 御禊ハ申の日なれハ暁来りて翌日（ヨクシツ）の祭
のとゝまり給へる歟
まゐの御かたくやさすひ出のく給へと仰くしを到させく
きてころまゝしきをおほしてまかれもくさまり給てこ
とくしき給のをも御して御車共たてなりしてさもんなをと
もろくしさひとつになほくをあらしもて　御さいく
宗 花散里ハ人よりさきに有り給我御とゝし出まゐるをいつく
ありとて御おもむきなる歟
事なきうちあつまりひとつもとあり　宗 暮略（リヤク）し給ふ也
まつりの日ハ暁よりまうて給ふへきにハ物御覧せんへき御
さうきにおりくまう寸御たちゝくの女房をのせて車をさけ
こもて　宗 申の日の御あそひにまかりて給へきを葵は御覧せんた

めのと暁御祭見にしきへおりまほしとや
御前ところ〳〵めくらし給ひとてめくりくれハそれとなくも見る
つまおもろくしきは御くしきほひきあり　宗 紫上とまきれたる歟
ようそ見の御つゝきわひとゝや
おもくハ　宗 源氏をも見ハ出給ふことに見えて有り
中宮の御さくミゆるを御乃車をしけまさり進給へるしおりの
事おほしいそく　細 六条御息所のみの
時まうるんおりあらしてさゆうありさまんおきさをかなす
ありある　宗 中宮の母御息所乃車ありてひ乃るを
紫上ハ源氏のうらう給ふ也
さりまれく思ありあそうし人ともありさまなやうくなき
つまにきと　宗 思ひあちたりしとハ葵上なともなと御息所を
さけ給ゆへに敏を思ひ給てかくかくしと也。

細 葵乃うへやはつと唯今の御いきれハ禁忌（キンキ）なれハつゝしみし給ふ

の給ひ出ちて 牡 物のきこゆるとのことや 宗 葵上ハ六条御息所

のもの〻け乃事と申しさとし源氏乃御物語りの給ひ

きこえ給へるなるへしや

御ありさまを他人の 宗 葵上ハ御息所を思ひけちて御こと

まれなる人のとて夕霧のなるや

中納言ハかくたく人にてまつりにたまうのかなめり 細 さこく人に

て給ひ出給ふとなる也 宗 中納言とハ夕霧なるやこれほと

に御息所をなくしこめる威勢（イセイ）ある葵上の子なれハ

夕霧ハ官位をもあまくりまて宰相中納言や御息

所のとされて御つゝ人の御女ハ柏木中納言とて后に立

給ふもこれにて万事もかへきものを源氏の御ものや

宮ハあつかひなされすちまて御ありけるを云へいとゝさとなる

遠ざかり給ひとはゝさめなれ共なれハ何事も思ふまゝにて

いけるほとの世はもくさまかりしかれと 宮 細 柏木や

中宮にハゆかりてあるしひなれ人もまたしひかるへきや

のこる御りんする心の世なるとのきとへなれ共ちるへきとを

さへむひさくかくるれとも折々はらひ給て 牡 紫上乃ゆ

くゑるまても御ほしやるやこれハ紫上の源にさく

出て御方にの御ゆとや心も世のものとくへもなく

ありの人御かんと今なるをさくかくるなるや

上あいアるとも許しまにしたまひ給へれもそなるに

出給ふ 牡 紫上のゆかさね源のさしきへ出給ふや 細 紫

上の機嫌（サイキ）なる給ひてこゝまて出給ふとも源の御

さしきや

五十日つきさ乃後を頭中将あつかりしを 花 紫式家五十日家

乃使を兼はうさを申けるは東遊(アヅマアソビ)とまうすくゆへや
舞人陪従(バイジウ)なとを侍つるさの後宮(ヒクワン)あるによりても使のうそ
たちまち文かうちちにさまざまの儀式あることや　弄 花
中将や賀茂の祭の使乃ゆへ必何(イカニ)一人を添ふことを兼
使は御さ以子息(シソク)中将為代りさると東宮に奉て東
遊を具せらることとあり
宋
賀茂祭にてしかるうもてを侍つるさ立るや是後宮
東遊の官人也於二禁(テ)中一其官人東遊したまふゆへ
を兼はうさるち給と云り
彼大臣にて出立所なるとそくとは承り給ひける　宋 内侍
みく頭中将の出立所をと見まかして後人ともは参へ見
物ありけるや
藤内侍のもまさとはつひ如けり　細　惟光かむすめ夕霧の
心ばへ給へ也　宋　あてかくしめて内侍也とゐる賀茂祭の使
使をとられたり
物語とおもてうち東宮よりしめまりて六条院を
とうきもこれとかふひともしほをそへまゐてたんへいとめてた
し　宋　藤内侍を后宮よりいそきて給ふなるひ
しき様也　惟光か女乃ゆへや
宰相中将にてたちの所にさへとふらひ給へり　宋 内侍の出
立所へ夕霧乃消息をとふらはちるゝ也　夕霧とたくひなき
きんなるゆへや
うちうちに思ひかはし給ふ中なれはかく座んことゝなるに
くるにけしまり給ぬるを　宋 内侍と夕霧乃仲はうちとけ
まと夜をかはしとやされは雲ゐなる所のうへ行きまうと
給へる内侍只ならすと思ふと也

たゝならすうち思ひけり　細　藤内侍の心也　夕霧雲井
雁に定まるをと也

なにとかやけふのかさしよかつ見つゝおほめくまても成にけるかな

宗　夕霧哥はけふのかさしはあふひのことをとりそへたれと何
とかやといへるに我ならぬやうなるは久しくあはれぬ
何ともひとへてもおほめくほとに我なるやうなるほと
名とはあふひといふなれと何といふやらんとおほめくと
の心也　花久く藤何ならぬ心也　宗　ことをとかくするといふ
かつ見つゝをかくいへる也

あさましやとあるを　宗　夕霧我文云也　何ならぬやあさまし
しきことの心也

藤内侍折をすくし給はぬはかりをいかゝ思ひけんいとものさわ
かしく車にのるほとなれと　細　こゝろさしとゝひ給へるとなれは也

宗　うち御折節給ひける文の返しさへとゝ思ひく物さ
わかしき車にのるほとなれとも返しするかなりと也
内侍か心也

かさしてもかつたとらるゝ草の名はかつらを折し人やしるらん

宗　藤内侍返しハ葵の使なれは葵をとりかさしやされと
かさしてもあふひといふ名をはさてとゝふ也葵草
何といふこゝろをよくあかつらを折し人やしるらんと
ハ夕霧ハ儒者なれハ院に及第の桂を折給へるなれはあ
あひとつふみそへてさにそ答給ひあと知れとよめる
なるへし　花　藤内侍と自の隠のひなれはさしてまた
えうり桂をおりとは夕霧もとく文章生にて有しになるを
及第也ともとりあそひくろ同日乃かさしなれは
是　細　そなたにてそなたへ給ふれとも夕霧ハ及

すの人なれはにや　河　名高きの根乃うつくしもおもひける家

の風ともおもひきこえてうれ

しう思ひてハむつましう思へり　細　桂の家風也博士（ハカセ）の人も

有　宗　内侍文云也　夕霧なうしてハなりしとや　儒者乃

ゆへにかくいへり

ちられぬれとつゝみいへと思ひて　宗　ことゝあれと夕霧也

ゆとしていひなる詞の詞かちとのゝ心也

あるとこの内侍なを思ひたえ給はす　細　夕霧の心をとめ給也

えひさきれ給へき　宗　夕霧の心也　雲ゐなる思ひおちり

まつられとも内侍とハ思ひなるましくとや

北の方そひ給へきを常になかなかしくハえそ

ひさふらひ給はし　細　紫上のそひ給へきとや　宗　明石姫

君入内の事也　御母ハ紫上乃事也　姫君の御母の事に

紫上そひてさふらひ給ハんとさはまゐる事なれとも本体（ホンタイ）

ハまことの母なれはさもあるましきとてかく

まかりなれたる也

かゝるつゐてにや　おほしたつへき也

かの御うしろみをやそへましとおほして　宗　源の心也　明石上

を内裏へまいらせんとおもひ給也

うへもつゐにあるへきことのかくへたゝりてすくし給ふを

かの人もものしとおもひなけかるらん　宗　紫上の詞也　明石上ハ

宮の親なれハかくへたてすくし給を明石上も

思ひなけかるへしとや

明石人　　細　明石上也

此御心にも今ハやうやうおほつかなくあはれにおほししるらん

かたかた心をとられたてまつらんもあいなしとおもひなり給て此

おりにそへたてまつり給へ　細　姫君也　紫上もしさうしにいひ給へ

なをも御室の母とゐん位としても喜しく思給てらく・
ミ給へきとや　宗　姫君もとハちや御室の親のことを
かまとおく思ひあるへきされハこれ御に入内の後
しろくにそへ侍らんとや
まうでとあへりあるほとゝもうしろめたくはれに侍りて御へとて
とかうしきのミてそ思ひられ　宗　姫君のおさなきうちハ入内
あそてハ人の事とちなれとや
めのとなとちかきとも見えたまふをとの心ハてるかきとある
を　河　見へ及てとかくあきそんのいふるかきとれ宮つかへ
とにも志給ふめ間に見えぬてとまてもしたりてせん
てとハあるましとや　ふ是のよしや　宗　めのとちるとと
わかくしき人すれえ見えとても思ひとくらさうとみて
てをやせおろ紀志とハ御清しとや

ミつくなんはとしも侍かくなきこん給ふしろ母きとかうるへうと
侍のし給へさ　宗　紫上ハきとゝひ又入内まてひとく多く給ふと
もはとかうきそひハおうしまゐ侍ましきとやされえ明
石上そひやされてありへきとや
ひとよく思ひよるかれと思ひして　宗　源氏の詞也
さあんとあるとうちもくるひの給ひされハ　細　明石上へ源
氏の給也　宗　明石上にほうしろミのことを源氏のうらひ
給とや
いもんしうまゝしたなるいかつかひ給ふなちらしてへの侍かて
くちすきんのことゝも　宗　明石上乃なりなる人へし
あんてとうれ侍あうさ海にむかるまへくいてこれをこ河
宗　紫上にもおとうなましきやうに内意し給ふとや
あきえなりん　宗　明石上の母君乃事也

程この御ありさま見まほしくのみおもふらんと一たひ見ん・

なまる　宗　姫君のうへや尼君乃かたや

よそもやと命をおしへたまへかなしくて行んしあるをいかにし

てうらと云すもかし　宗　さうねへ申さハ何さま君乃命つれ

なさけありへたくさうすも姫君を今一度見んまいらせた

きかた乃んや何としいかにして見んまいらせんきこそと云すも

かなしき尼君乃かたや

その夜ハうへらひさしく参り給ふに　細　紫上をひて参り給ふや

清て車のうちにも内侍のすけとへいらせうらのうへゝさて

わかたもさそひさくうちへかくかくみつきるてまつり給ふ

むつのさきをふてわかいらせ姫君の御物かたりしへまいらせける

しうさふ御参り給ふかき　宗　明石の上も紫上乃入内まて

ひさく参り給へとれとも紫上之輦（テクルマ）車にて参り給ふ

我ハ禁中をとうちうて何ゆゑ給はんとかへらるゝしう

らんとも内侍ゆゑ申さ禁中にてのうしろやうに

てゝも明石上の為かくるゝうねともむさとうく姫君

ありきひとや我かくありし姫うるもんくるしきとや

世にあれくゝも常にくハ姫君の御ひとつらんうちく

との明石上のんなりんし　花　紫上ハ姫君をうの給

てゝ車にのつて参り給ふ尼君の御もちうくもり

何ゆゑなりしていつにのん参り給ふくおもひしと見ん

みるしうへきよしやさと　昇　輦車とハ姫君の車にこ

とまるへし紫上ハ同車して参内あるや其乃行

なは紫の上車ゆるされ給ふことをいちうかくありて

あるやとて明石上乃るすの御へし花さるよ尼君のん

るく有様を和うんくるしうらみとも声あり文思

ひとまちおりけるにまちかねてかれは業平の
召使のことくの給へる事もあらしと思ふよし
めつきこと く やうしてなき跡にも猶めてたくおもほえし
細 明石上にまいりし後は斟酌あるや
河 上古も女房もてなる事ゆるさぬ事といへとも
おりてもちのかたく祇承とはしまてて家並也
人のめおとこなるをきれるはやことかしつめとそ
のかへしのはしめさ度こそあらぬやうなるともなく
うつさきを人まり行て　人のめおとこなく　細　ちきれぬ
人をまうしたはなれてかへしとことのくらまつけても
御かへりうちわたしとはかなしともあしきをも御同を
宗 此昔男をとこの事とといひなしてかくかまへ
うらんとの心也人のまゆかりてやい給ふへしと

又思ひて我まことのためにこそはしめの心
のあるしにや　業平此事をいふなるすき心と
細 此之上勝ちのしれうへしるらしや
物くるしさいおのれもらくいつるひとつちんはらぬなる
もとの御同也　宗　源氏も夕霧の心も戯に宗上
のたまえのためにあらしとの事御かしめてたまへし
又めてとかとは海にくせぬ事かなれと云んや伊勢物語
あくかしもおすなるそなうへき云事おあぬお見めしん宗人
まゐらしてそうへきまうしてさしおかしたらかかりて言う
語殿　宗　此業上の後へのふ月へ此業よそへひとまて初めの白袴のけと退
おかるとて　元の業上の本にちるうのとうの事と云ゆ
ては業上の後へ上にて御対面あるへきしや　細　此業上は頭さあり
く此なるものは立ちの語也

法文にめんあり　細　紫上明石上は法事有るや
案　ふりぬるは明石上は紫上の方もちゐめて紫上のひ給
ふや
かくおとなひ給ふもちぬにさん年頃の御事と思し遣
給へるはさくしきさそてのこるまいらやとちきりしう
ゐ給ひく　細　紫上の御事や明石の方の御ひとち
給ふて明石上と紫上との法ちるの給ふ年頃の御と
むしまいらせやうとくしきさてとは甚深にと
そのまきれ御案をかりし御とにとは深心のことを識故
しるしそ紫上の給ふや
物語有之給ふ　弄　紫上と明石上とのうや
これもうちのまきれるをしめ有めり　案　明石上と紫上
とならちゐをあそ給ふんとの基や　あなたの批判や

細
これとのゝ文字は姫君をも成人ありてはなし給ふや
とあるや　抄　此内よりもうちのきゝたりしに又かくう
ちとをあかぬさしつや
物あるとうちひゐるまうひゐるとも人そてつとめさまし
うかん給ふ　案　明石上の桁をと紫上の心は源の思ひ給ふる
もとをあらぬとめさまつさとや　細　明石上と本性人
と紫上乃心給ふや
又いとあさうら法の事をたつる法のしきをおかしくにめてた
しき心く　細　明石上の心や紫上とうへ　案　明石上も紫
上乃法さとめてしくかなるやうや
そうくれ法中ふともそくれめる法んさしますてあくひ給ふ
さ海まなくまつ給ふるをも思ひとちるもと思ふまゐる
に　細　源氏かくの法中ふとも紫上をいとあらぬやうに

志らべつるを聞つるや　宗　源乃あまりさのさひ人乃中．
慕ひ奉れど御心さしれなくひまくちるまつ給ふと
ともひさしくなることの御心のへたりたるへし
かくまて立あかくひ出ゆる葵あふひるまりやらんと思ともの
う〻　細　これは立あかく姫まゐりても我身をもさひあつかふるや
宗　さら葵をは葵上は立あかく姫やうにあれたまへることを
たまふとも志かることの御心よるのんや
出給ひし花のいとちとたにそ聞く　宗　葵上の退出し
給ひ西をとかんく御心よのんや
混てる夜なをとゆるされ給ひて女御の御はまに給はさかさまなる
らぬと思ふらくあるに　宗　葵上は琴単ゆるし給ふ程の女
御の浜法ほにおほしきさとの御心よれんや　細　葵上乃
ことや花なる姫君の法なり空なりつく葵上れ退出
きこえれて及ありけるや　宗　葵上のこと女御と云
人の人とさとも也　花　花ハ御心姫君乃りまさと女法なるの
立郎乃ひとと車なるとゆるされ給ひて姫をぬとおもふ
あり御心よれ給ふ給ふへとうきる翔也
法さくれなるみの猶あり　宗　御心よれんるまへて葵上は
と立あかく姫君との中の葵はるをふたるこそとくとひし
に今禁中よりとて給ひ西をとかんくハ我らすまさひく
らなるにさしくるある身のをとく翔し給ふへんきるし
られしきに見みるれやうたる法宿精ゆめれくらし
てかんきまるたにと　細　姫君乃法なりや御心よれんや
娘のさとくまらぬハ見とつりの御さそ見へし法ありある
られきとうなものひさこみてけり思ぬ物ハ洞なりあるき
宗　うきみとも又うれしきみとも間ハひとつものとや他乃んし．

けりもゆるさぬあれハ前斎宮の心にハおほ遠ざかれとも落葉ハ
同しこのやうなるさは源の宮ハ身をもまさらく
ひとへ心地とそ見えしぬや
そしはやうつゝにあけきさらつゝけまりくうれ見ととひくし
はる命とものゝあはれに　宗　明石上の心にハ此年頃のうさ時
ハ命さへかしくとはしきのかくもれとハのへまのか
しうさひ給ひとや
されくしきにつきても　宗　明石上の心ちなれハ此迴
事ともに給あの琴をならさるゝは見ひしらる　宗　まして明石
御方にも此明石と敷給て田嚢なといせとこの給
しるなるとこゝろなんや
とよさ海よりつきにてふしよもなをうつゝにいれまくる
きんのらうしきさるれハ　細　姫君の御方なる也

宗　明石上のはゆるし給ふ姫君なれハ一際とらうしき
ともかくに及ぬことのみ明石上ハそれさへ思ふのかれぬや
大臣のよろこひよろこひなりうちしめらすべかりあるぬはさ後な
こらうたに　宗　源の姫君とハいひ無双(ブサウ)の美(ビ)人と云ひか
たくに輒(テウ)くるあるはさるかや
宮とわりさはんちるいとんつとにさひ給ひ
細　東宮也　孫　春宮乃御事
いとゆる給へる御かたみえん事ともこのたくらうこれかくて
いかゝひ給をさはれてにいひなしるとそれとそまたにあり
あへくもおしきていあしあひなれるをハけしみと
いそはんまくうこのある御事なひと　宗　姫君のかれ
女御なとたつゆうに母乃そひ給をさすのやうり
の給へるもそれかまされ給をぬとや

ちられさきもとにつきてもおしまるゝまてちらしぬし
行人是は廣上人なとものめつらしきいとゝおかしくてとかくし
宋 聊の事なれとも明石上れん奇特（キトク）なるへくして風流（フウリウ）
に侍るよし語る也
侍る婦人くも心をよせある女房乃かういゝ事はさ
へいしくとくの人なりし行なり 宋 明石上丸女房達まてを
指称の一事なれ是は廣上人なとをきさうのあしらひ
あるよし語る也
うへときさる人さ柳なるふしまかり語なれちるへくひほしま
ほしくうちとをゆくに うへ 細 紫上也 宋 紫上ときさ
いくよき乗り行て游ろよとうちとをくるひ語とや
さゆうなるとても聊とも明石上乃あれくしうす
努（ユメ）くあるつくりしき来すれんとや人とにあしま

ゆかしき様乃事也
侍りとてさしもえ給はれはとかはしうかうへきも
てなしなる露ともなくおゆし侍りしきんの
有稀人なりけり 細 可然人をめそよとと云語なり
如くとなくらむ咲ことはちさるく書丸こなりとおほしうつ
宋 源氏ともなく承まゝさ待のえひなれなとても
なとひ存命丸うちに姫君の入内あれかしとおほす
めすとも侍んにかなひあるはの有様とや
傍乗りひあるさ凌にかなへらるし行て 細 光も源
乃う様しくと語也
ゆかしあれと思はう紀ぬるやうはくみんうしうる
宋 源氏の子也夕霧丸う紀ぬるひとつもここは云なんかう
うちゝも云故ハ夕霧丸くなるを内府に遠慮（コシガウ）ともせん

しゐて給をゆるし給ふべきに一向まゐるまじきにはあらずよ・
くしやきぬた内府のうちの事をひがうがうて係給やう
まてむくへうり給へと源氏の御心おちゐてなきこと
とまき給ふとや
宰相乃君も心ひとつくめゆきとききおよぶまゝ給ぬれ
ば此君おもちゐて給て今はいつとしらけりんとおぼ
したる　細　雲井雁の事をゆるし給ふと
くらゐの人乃清く世の事もてかくれなきも中宮をあそばし
まうきをおもふかあらぬはんするをあり　案　源氏世をのか
逃んとの下心やまさるひ道(上)世(セイ)よ心立給ともはるかにさとは
権かくなふんやされとも秋好乃中宮めと奏(ソウ)し給ふ
よし給へもさきをもおもろかたきしたまふへしと清
かよをもやまのあり姫君も志(ミコト)乃毎よのきは紫上を

第一乃親のやうにおぼし給ふとや
此清うるにもよふにゐて逢ある親さまにあまりいひゆるし給へ
それもさるともやおほしゆつりある也　孫　明中宮の事と案
上を真(シン)実(ジツ)親のやうにおぼし給ふとや此清うるによもつるは
秋好おもむきを時して申る也位拾一儀あるへし
夜の清うる此時くにもれやさ給まうしさこと宰相のきめし
給へれてとられとりくにうしろめたくおぼしめうり行
案　花散里はさにくにしてもれやうにとも夕霧を奏し子
にし給へは清くかくよんまとあるくともなる源の心也
あきんやしるそもちにありおぼ御賀の事とおぼゆまきよういて
しめまうてなほきなるよの心そこあり　案　源氏ともし卅
九条みてまうしまとは此もん年は四十賀なへし
河　桃園人四十賀例堀川のおほいまうちぎみ九四十賀九條の・

家にてしける時に　業平　桜花ちりかひくもれおいら・
くれむといふなるみちまかふかに

その秋太上天皇になすらふ御位を得て　案　源氏卅九歳の秋也
天子の位をおり給てはそのつゝく太上天皇とや申也
なき人をも太上天皇になそらへてもた謚号（シガウ）ともいへる号
ともいふやそれをも人によりて差別（シヤベツ）の有ごとく

御封くはゝりとはもとより御封あるにまたそひ給
御封くはゝり　案　太政大臣の御封三千戸也それに太上天
皇の御封をもくはへらるゝ給ひてといふなるへきを河海に
太政大臣の御封を二千二百五十戸とあるは何ゆへにや
はかりかたし　細　年官年爵（シヤク）也　案　太上皇の下にて
官位なともむしんと又此御ひ給そひ給ふとや　花　長器
天皇以下は皆謚号（シカウ）也位につき給へる帝の位をさるとき

てそ給つるはまさしき太上天皇の尊号也位につき給
はぬ人の院号あるは敦明太子を小一條院と号せられ
し其例なるにや但太上天皇と号せねとも
院司年官年爵封戸なとは太上天皇に一事もかはら
さとなむし是によりて此物語に薄雲女院　新　六条
院の侍けるなみも太上天皇になすらへ給ると云詞をかく
なりこれは其乃脱履（ダツシ）の後の尊号にあらさる故也御
封乃ありは小一条院乃院号の時は御封以下如元と宣下
せらる故太上天皇の御封は法令（ホウレイ）にいまた定られさるこ
となりし東宮の食封は二千戸のよし延喜式にのせらる
まつこれは小一条院は東宮の時の御封をそのまゝもたせ
たるゆへや又源氏は太政大臣なるを院号をたまはり給
へる太政大臣の食封（シヨクホウ）は禄令（ロクリヤウ）に三千戸のよしみへしたる也

条院の例をもつて三千戸ほとのことくなるへきにや　忘
給へきにや但くらゐと云司ハ三千戸乃よろしからん
こゝにて法成寺関白なとに及て今は封をとらへ給ハ
申しことなれハそれハすこしかはる殊恩なるへし六条院
乃御封のことゝられしをもて了簡（レウケン）有へき也河海引太
政大臣封戸二千二百五十戸とられたるはあやまり
法令の法ハ三千戸弁明也云々　弄花同
かくてもとの法令よりかみなくみなきれと程めつらしきを
承　案　源氏を太政大臣に准給ひしも世中れ何みなみても
おまつりし法ハたゝしもなきことハ古紀ろとも也
昔ハまいをと行しためて院司ともなるともあり　案あらためて
てのてハ文字をよむ説あり又濁（ゴ）るとの一説あり師説ハ
よむへし濁説ハ一条院の例をさまくにも云々也　花あり

なかての司ハ政不政の二乃れあり源ハ此乃太政大臣なれハ
ろまにに作らしためて院司なと補せらるゝなるへし又誠ハ
太上天皇の昔れ例をあらためもして院司なとを定ら
れたるなるも有也　細　ての字清（スミ）濁（ニゴル）両義也濁時ハ太政大
臣の御封なとかはらせ給ふとも也　弄　花鳥同又一条院ハ御源氏
物語以後なれハ其以前無例也
まことにはひらしならそひ給へハ　案　源氏位をうる也
給ことを云り
うちに参り給へきことかさなるへきことぞ何となく御頭ある
案　太上天皇なるとに准給てハかろかろしく参内あるとのよし
るまじきや　細　かろかろしくまいるましきとや
かくても猶あかぬとハ物思ひして世中をそくもくして
しかもとえゆかり中のとかをとなりあさゆふの心ほすけなきこと

なり給ふ　栄　天子ハ御位を源氏へまいらせたくハおほしめせと・
　ともも世中をとかくいひてえゆつり給ハぬ事を歎かれ
　給ふけしきなる也
内大臣あかり給て　栄　内府の太政大臣に成給也めしてそ
右大臣の成給て此次に成給てとやかくやうちなりとかよ
まさなる事也平清盛（キヨモリ）も内大臣より太政大臣になり
給ふといへり内府を後に致仕のおとゝといへり　細　内大臣
より太政大臣に成給也　弄　同致仕のおとゝなる也　栄
の初に太政大臣と見え也内府より直（スグ）に任せらるゝ事例（七十）
浄（ミ）海一説清盛公も内府より任ぜられ也
宰相中将ハ中納言に成給ふ　栄　夕霧の又中納言に成給也
清よわかきひとに出給ふひろきいとくまさり給きことぞかしより
りしめてあるまじきなるさま　栄　夕霧中納言に成給清凡

又弟内あるさまと内府見給ふ中くの文は今ハ雲
ゐ雁の気給あるよりハ人のまもとさまして給ふや夕
霧のことくしきおもきを清給ひての也　弄　夕霧中
納言に成給て清くさしくハ出給也　細　内大臣也
けるものおとゝも
中くになとされもをさましき宮はくへよりもをかしうする
細
雲居雁はきこしの文はくへよりハ夕霧に清くさまり給
と細くへしとゝ給也
女君の大輔乃めのと六位すくせとはつやきこしひのくし物
のたうくにおほしいてられきくれけにとおもしろくかれろひ
るもると　栄　雲居雁のめれとも夕霧と宰相の大文にて
ゆひ給し時物のうしめれ六位すくせといひおとしめる
るすをおくくにおほしいてるさせ給ふとも也

たまはりて　宗　大輔なる人のもとに菊にそへてつかはしける

浅みとりわか葉乃菊を露にてもこき紫乃色とかけきや

宗　[illegible]六位の袍ハあさき[illegible]なれハ[illegible]てよめる也

くれとも浅みとりといへり四位五位ハ深緑也中納言ハ

[illegible]紫なれハ其色をも[illegible]こき紫とよめり[illegible]菊に

六位も[illegible]頃しも時雨にあひ紫になりなんとそ

思ひけりしと大輔をとらへてよめる[illegible]とそわか葉の菊

[illegible]此時をとまり　河　浅緑ハ六位袍也紫

ハ四位以上袍也こき紫ハ三位袍也古ハ四位叙三位之後着紫

袍之由旧記見えたり三位より一位まてハ同じ色也今

世ハ四位袍も公卿も[illegible]なり　後撰　庶明卿参議より中

納言になり侍りける時九条右大臣袍をとらせけり[illegible]

や君か衣をぬきかへてこき紫乃色をきむとハ[illegible]

はかりとしてこきハ中納言乃なるをいへる紫といふ色浅きハ

浅黄六位袍[illegible]也　花　袍色ハ衣服令一位深紫二

三位浅紫四位深緋五位浅緋六位深緑七位浅緑八位

深縹初位浅縹也深紫ハ紫草卅斤にて染浅紫ハ五斤に

て染也深緋ハ茜に加紫浅緋ハ茜ばかり也深緑ハ藍と苅

安とにてそむる也浅緑ハ藍と黄蘗とにて染て縹藍

ばかりにて[illegible]世四位袍三位以上と[illegible]一

条院正暦乃比より[illegible]小野宮右大臣

[illegible]

[illegible]浅緑とよめる

ハ七位の衣の色也六位なるへき深緑なるへし又二位三位ハ

浅紫なるをとらへて紫とよめるハ一位の袍乃色や[illegible]の

[illegible]大概[illegible]常に[illegible]庶明参議

乃中納言なりしかハ九条太政大臣袍をはゆるしてこそ
紫ともいふへし京極中納言も参議従三位乃時紫の
色ゆるされてハいかゝうれしき浅緑のうすき天乃羽衣と
よめり後撰ニ有もとつきてかへる也　私云　古注ニ紫
はあるうちそかへぬといふはぬへし天乃羽衣後撰の哥乃返
哥也　広明朝臣　細　六位を云也紀貫之ハ三位也　河　夕霧
六位深緑七位浅緑又二位三位ハ浅紫深（ユキ）紫一位袍也　私
と六位をくせさと浅ミとりといふ又ニ紀貫之ハ六位とめる也
哥乃趣也

かくのさしわきけれハ葉てそこゆるしけるといひと自ひやう
にるへきなり　宋　めのとの六位をくせさと云し河のこと歟
夕霧此今の君也
さうしうれとわしき物くしうへくるまり

細　大輔乃めのとか心也　細　同
二葉よりなたゝる園の菊なれハあさき色わく露もなかりき
宋　大輔返し夕霧ハわかきよりなかく名を立給へきなれハ露の
色もあさきとも見えさりき我ハわかくしたてし
にゆるしてよむ也夕霧を菊にたとへ奉りなして我を
ハ露にたとへり
引哥　植しうゑは名高き宿の菊なれハ却と見えてや香も色もくらん　後撰　業平ア
河　数ならぬ身をもて人はとへなりぬる宿の香をとかめん
花　露ふかき色をかくすや此菊なれハ花のあるしやいかにせるらん
あさきいろハ浅緑也やまと　細　あさき色ハ名を立たる也
さゆうみえさむなしき袍をと除しなる也
いかなるをも給ハる事なしかいとゝうれてなむしるはやさ
なひきなるとて数清をもさしひと所もなれハ　宋　大輔か昔

のきは根をのこし給て夕霧の冨んし給やとめのいとぐく
なやましく思ひ迷惑もする也

三条殿にわたり給ぬすこしあれにたるをいとめてたく
すりしなして宮のおはしましゝかたをあらためしつらひてすみ給
宗 大宮のおはしましゝ方へはうつりとや内府まてハいさゝけ
なくて似合(ニアヒ)給ぬゆへに此夕霧も雲井の雁をもとめつり
給也 弄 故大宮の御部屋也二条の家のかたは又大宮の住所
なりける成へし 細 大宮の住給し住所也
むかしおほえて哀に思ふさまなる御すまひなり 前栽なと
ちいさき木ともなりしもいとしけきかけとなり
宗 大宮の住給ひしを思ひ出給也 植栽可然大宮の住給し
給へハしけきも今住まゐする心也
一むらすゝきも心にまかせてみたれたりけるつくろはせ

遣水のみくさもかきあらためていと心ゆきたるけ
しきなり 宗 荒わたりし一村薄も心のまゝにしけきの
ところも数なる所 白氏文集 鬢(ビン)絲千万(シ)白(シロシ)池(チ)草(サウ)八九緑(ミドリ)也
童稚(トウチ)尽(コトゴトク)成人(ヒトヽナリ)園林(エンリン)半(ナカハ)高木(カウホク) 細同
おかしき夕暮のほとをふた所なかめ給てあさましかり
し世の御おさなさの物語なとし給ふにこひしき事
も多く人の思ひけんこともはつかしう女君は思し出
細 雲井雁夕霧也 宗 夕霧也雲井雁の御おさなかり
し時ありし事ともを思ひ出給ふとも也
ふる人とものまかてちらすさうしさうしにさふらひけるなとま
うのほりつとひていとうれしと思ひあへり 男君
宗 大宮の住時の人々今に堪忍(カンニン)してある也
なれこそはいはもるあるし見し人のゆくへはしるや宿のまし水

細 名こそなかれしとや、私 夕霧大宮にもらしとなるへし・

宗 夕霧ハ名をなかしけるを流るとかいひなせるにて

大宮の清る也そのゆへに云ハ水へるやとやもしるへき

二條清水也 河 二條清水院周辺に様ましなるといへるを

清水をいふとあるは清き水をいふなり八雲抄に出水と云

打聞 我やとのはなにわかれ川の底にうつしてそ見まくの花をしるとかや

女君

あはれ人のうきをしらぬもつれなくてんと申涙ハさし井乃水

宗 雲井ハ雁をいへん大宮乃清涼ハ見えたまへし井の水井

なにくにもあまたにあまりたる清き水にもやしれん

申すなる事をも語りてもあまたの中の外と云り

河 小井やいさゝを河と云も底のみなとの浅くしてあな

ろくと云やうに申ならしたるなれんや

抄 あはれ人のうきをしらぬに見えし涙ハ八波に流れてや見ん

細 大宮なとの清水なるとも見ゆる也 私 雲井の雁は

のかはしにむかしをおもひ出てあはれなりしと云

うれゆくをとも申涙ハひとつなり

ことの語に似たるむかしをしのひて思ひたるを

宗 内府の様子中より退出のさま也

おほ宮へこまかにかたられてよりかへり 宗 三条院

の大宮乃西の殿に立寄れる也

昔ありしまゝひ清河ハさしてまかりけるハあはれなる 河

ことしかはらぬをはしたなき清さなるやうかはり

と見し語にて色いろとの哀ま思ひ出る 宗 いかにし

大宮のありしまゝ時とをおとろへたるとおなしく

侍るまし語也

中納言もきこえかへさてしもあらそていとく志
つまりてもの給ふほとくらいてさきたる御
ほゝゑひたまへれと女ハまことうちとけぬひもとくとう
あらんとみんとて給へり男ハきこえまきらはしきよみくにお
ちかゐきるへくとの給ふまへに来るとて　案　宴の詞花る
すはゝ夕霧乃内府にむかひあるさ海との給へり師
説ハ夕霧もとつれさ海を見く大臣のまゐると也
て酔こと来るゆへ内府の諫おちなれたき紹弁
と申さんしてまかりしくゆくしむなるとも
花又内府乃翔に抱き衣にお返さる心てある源氏
ほれハ師説のまゝるかも　花のかのあるむかしハも
ちるらんも内の姫くにゝ法すいるをといひしき
まはちら給へる也

うとさひ来る志とくとも申ていへ　案　来る花ちとくとも
あるほはる法に来くひ花のちらうると申さんしてまさてう
ちきなるれ給ふ　案　内府の二所乃声をも法さんしてちお
まゝ給へる也　細　花乃ゆかりの意の主也
このゆえ花にまうてくるかれとおほきなるへとゆえしてとの
給ふ　案　二所の花此音をもちらんと思ふく内府と給へと
とふやうなれハちくの自他おかつりつるれハつらうき
とて斟酌（シンシャク）し給ふ也　花　藤ハ夕霧此自称（ジセウ）の詞也
弄　夕照たるを見給て空ゆくをも見給ぬへけれとも藤なれ
ハ夕霧と雲乃高き花中まて斟酌のよし也
細　藤ハ太政大臣也花なる夕霧也こと
そのかみ花本ハ也へもしくらぬうらへし小松も苺おひなけり
案　内府ちかくを苦しむ花本なれハうらみも理そとや申すへ

よそふる小松は人皆れおもひされたとのみあるへしけれ
今是は年のうちにてこゆこん夕霧雲居雁も生長（セイチヤウ）
し給ふハとのかも花の詞に姫ハこと心へしあとあまた
もこの子のそていさく給ふくよめるや

河（万人丸）（人丸集）
子日しハかゝらしせんとやうかゝらへし松の末をと給はせに
昔乃子日る哥乃ことをひつ様し小松をしけむしにん
哥乃詞に哥ハ其と心得て也ほう姫君大宮のこと也
雁のことゝなりしきんよ姫るに下に宿へこそ元

細
ことうしてやハの給ふれとかく子の心ともよ給也わさ
人ゝ其地人しておもハ思ひすとおもれるとや
おとこ君の宰相のめれと　箋　夕霧れめのと乃宰相也前と
夕霧を内府の給ふし給ふて是ま〇も今ハ志てら
うらしてよめるや

はかなきことも是て〇ハ志てらかに
細　明もくとうしめしかとふるや
うれしきものとそ思ふの心二葉より待さしかしせる松の末へく
箋　宰相の方夕霧とゝも雲居とゝもをそのこやとや二葉よ
河後撰　つるかハおもさる記行より待かゝりし給ひとくとや
おりつく給と云あむ此殿乃松ことる松の風よもとうる
おハ人ゝもうれ思ひはつめあるとや中納言云ハおり
しと我れ八女の君ハあらるゝおもてほうよそてうるしとこそ
踏歌云月乃十四日ほまうれ時と朱雀院に行幸あるさ
男踏の盛ふてもさうほる人ゝさこりゝゆきさなるにとさ
くおんすらも思ひすらうこほりて　花　康保二年十月廿三
日村上天皇の朱雀院に行幸有し例とうつく
うまるや河海はえんしたりうきぬてきるるは及はぬ

舞楽 同

院さへ見るとおもへはいとゝめつらしくあるにや
ふみねふとて世人もみを知とろいはあるし此院かくさも法
人をはくしめぬもあやなる御心まつきをさせ玉ふも御事の
時よ行幸ありとて 河原氏より法使ありて朱雀院も法
幸や行幸とは申事へまいれるなるや此時の行幸冷泉
院乃法皇なるへし 案 御ゆみの法皇としての御幸とそ也
まつむらもみそのよたちのはらさの法る御きさちしへてたち
の又楽るちよひあるさかり 案 たちのを楽司るとも
御きさあいへて御縁せさせんとて此用とのさ侍る也

舞 此る上楽院用意也
又月乃せちよはやめ玉ふれもそのひさとも 案 競（ケイ）るあとの
拝よ擬拝不（サル）語（カタラ）也

ほしくくらやとハ南殿のまへてんによらうねこひきまいれ
案 未（ヒツシ）さゝるなるや
くちのかとのこと見とたしやくさのよハ錦をしき 花 莚の
上に布（フ）単（トン）に錦をしかれたるといふ也
おくらちあるへきはよハせんとをほきいひてうたあさき
所へり 案 箏をともあり幕（ニク）此やうなるもの也
ほんらいつきに舟ともうきてこのふひろのおさ院の
うちひをめしあそひあそふを御ろさも御へりちくさ紀を又
ともにひあり 案 内裏（タイリ）の御厨（ミツ）子（シ）所よ立て精絹也上東
院の精絹をめしあそひてる也 舞 問云御厨子所乃
精絹乃おさまりハ内裏よはるあるや一勤衣（コロモ）御厨子所
とそいふ上の御膳（セン）をはうさとる所也そなへもとにれ
ある精絹なへしと

細 同

わさとの御らんせハあまたさきれとも花さきを給ふらちれ当うら
むかしの山乃まうちきみかしこきおほしめしを　精くひかると
うちつれハわさと来ちかくて御心の御さまとも此一具よし
給へる也
あしの御まへハふしきとあるを中比給ふのくへせさいれし御中の
をこのきさきてかしこまりて御らんせさせ給ふ
みかの宮家　細　中務卿也　孫　柱姫のうさたるへし
桜とか（セニ）らすてゝるら也
法さみつかよりまひあかゆかし此宮さハくちられまた
院と云朱雀院とや　孫　御門と朱雀院乃御在也　細　朱雀
せんしあまくおはしまさ給ふ御とめてさくりとなれと
細　あまつれ此在をもきさ宮をてうるを同庭にあつかたあさき
給ふ也　宗　御門の御在なる源乃御在ハ院乃まさなる紙御つ

のせひとくおとさきを給ふとも思ゆへハあまよ上天皇と云く新
りまし又下乃人ハ冷泉院の父まてまうしませんや
御つハまうとりきるを承るやくしさを尽くして力をなす
給ひぬことをさらん御ほしある　宗　つやくしさとハりゆまかん也
御の父院つへ行幸とハ朝勤（テウキン）の行幸也とや　御門ハ父乃
ことく給ふをとらせまうひやうく御ほしめさともおほす家給ふ
せぬするれハ父乃ことくうせまうひやうき手なるうとふかくと
おほしめしひとの御心也　花　朝覲の行幸ニ天子帛給ふとき
ミて上皇をを拝し給ふかくや　細　朝覲乃行幸此時は
みも見えぬとや
池のつゝみたのおほとり花へ水のたゝひのきさきはれなとは
うまつまるとうひとたのすきさうけてきんてんのひ
んりよう御前よりくこそしれひくるまえるまひさをつる

そうきて　案　左とあるは鳥のことわるとよや又右のもとさく
く落とあるは鳥をとるを詠るハ御かろうるよやと存る此
御哥に山影をうつく雁(カリ)とさもらし也あるへし　并田代作法
門をまゐる儀式也又鳥ハ左とあり詠るうち何ろ人さに
や一答(タウ)られハ定まる御あるし　奏者(ソウシヤ)ハ書をあるとみてとも有さ
とあり鳥驚の勝負を時よろるや魚ハ御前の池まて
とうによりて此時も鳥を賞(シヤウ)せしむるよや又前段ハ五十
速(ソク)まるもよろうへきるよや

おほきおとゝおほせことたまひててうして　案　内府のことあり
太政大臣のゆへにおほきおとゝと云り
おものにまゐる　細　御膳に参る也
みこたちかむたちめなとの御まうけもめつらしきさまに
つねのことともをかへてつかうまつらせ給へり　案　まうけ

やは御一献(コン)のことや　花　又是取献物(タテツキモノ)をとゝのふるよや折櫃(オリヒツ)
献物(ロクモツ)るをとめつらしき御さまにはくし侍也
みな御ゑひになりて暮かゝる程に楽所の人めすわさと
の大楽にはあらすなまめかしき程に殿上のわらはへま
ひつかうまつる　　みな御ゑひ　案　沈酔(チンスイ)の事也
朱雀院の紅葉の賀れいのふることおほしいてらる
案　桐帝此朱雀院行幸有し事也
賀王恩といふものをそうするほとに　案　賀王の楽(ガク)也
おほきおとゝの御おとこの十はかりなるせちにおもしろう
まふ内のみかと御そをぬきて給ふおほきおとゝおりてふたうし
給ふ　案　内府の御子也御つかひそぬきてくたさるゝなりされ
又内府の御拝(ハイ)ありてふたうし給ふ也　河　子息(シソク)朝覲(テウキン)行幸(ギヤウカウ)勅禄(チヨクロク)に
時父舞踏(フタウ)定(ル)義也

あるじの院きこしとは、もみぢの賀のおりを思出給

宲 源氏青海波のことを思出しめづる也菊をおるかざし

のことゝなるや

色まさる籬の菊はをりをりに袖うちかけし秋をこふらし

宲 源氏の心ハ色まさる籬とハ内府と源の官位のかはる

ることをいふ菊によそへてあるやされどもおなじくらゐに

内府も中将の時青海波をまひ給ひし紅葉賀の折を

忘給はじやされども袖うちかけし秋をこふらしといへり

細 こよなくちかはしきひしとや

おなじくの折ハあるじもたちまひしたまひしを我

も人なみにまじらひつる身なれども今はかくてこそあれ

ある事と思召しおぼし時ハ猶おもひかけたまへり

秋こひしのこゝろ 細 色まさるにつきて八及(ヲヨビ)なしとや 宲 源氏

太上皇ハ位をとりて内府も太政大臣の位になりたれど源氏ハ

我も人もちかくまでなりあがりたるを太上天皇になりて

ことのほかの御遠さとの内府の心也

紫の雲にまがへる菊の花にごりなき世の星かとぞ見る

宲 内府も今を盛りの出山(シユツサン)の時なるべく紫(シ)雲(ウン)也花ハ奇(キ)瑞(ズイ)

の雲也されど引くらゐあり菊の花も紫の色ある物也

慶(ケイ)雲(ウン)寿(ジユ)星(セイ)とて天下可祝嘉(カ)瑞(スイ)にみゆるなりや今日宴

菊花を紫雲にも寿星にもなぞらへて目出度時を

ほめはやさるゝ歌也 此紫雲寿星ハ或賢人聖人

なとの世に出る時これ二の嘉瑞ある也

花 久かたの雲のうへにて見る菊ハ天つ星とぞあやまたれける

河 紫雲寿星をも南(ナン)仲(チウ)記(キ)曰(ニ)膺(アタツテ)紫雲(ウンノ)之瑞(スイニ)生(ヤスルケ)寿考(ウ)也雲

八向(ニシ)於北斗(ホクトニ)乗(ニ)南閤雲滝渓之上(ニ)臻(イタツテ)不荒(ノ)母(ハカニ)感(メ)気(キ)悦(カイシ)神(ンニ)雲(ウンヲ)

紫雲之下ニ入テ堯母之腹ニ懐姙ス堯ヲ也文帝王世紀云堯帝生時紫雲霞於殿上ニ帝時雖遭九年之洪水ニ民謗不菜食 年四五十あれとも何の河海ニ紫雲立星乃んともに仙境のことくめ何一所紫雲とハ河海よりたちてく堯の時乃奇瑞也紫の星ハ徳星とも云皆聖代明時の奇瑞也仙境のことみえしめでたきむらさきの雲とハ菊乃紫よりもきわり又菊ハ星よりみえたれなゝしぬ星ともあるとも又紫乃雲と禁中のちかとにもある名の色あり

時ニしきなれとかくし秋ハ又風の吹しく秋ほとのかとくこゝちうすきさ 栞 源の世乃ほうかをほめて咲し秋也

古 秋をくさきて時しきなれ世菊花しつかふくにきぬかのさかれ

細 引きあくるまて 抄 引き詳云月なれともくいう

いのしるをたちぬあるかさをのくらへてみんとまうす 花 咲乃の色

よ度よ錦をたてさるなからよても見えしめりと庭乃面まてちりしきたる人のやんごとなき家の事ともなきとみゆ 河 良家の事也

あをきにうつきたてつるをもとをいうなひそめたるとはものゝこと

栞 白橡ハ黒みてうすき地に色うりある物也 花 白橡に二色あるとき八青色あるとき八赤色也そのこに染るをハ白さるんはえとえるるもいとく緑の衣とや云ふてふ 舞童の衣束とうり左八赤色に蘇芳にて下をなへ八青色に蒲陶染の下をも也 聖 紀葉をも左の舞の絹ハ赤なとふ八青色をこさる侍葉をに饗しなるぬ河海にはるなそれ凶服の子内宴なとの例をとのをこしをるあるそてハりをたつるをて也 水原抄 水原乃説ハ皆服也とも 和 あさこさたてつるををあらさたてつるなとと云んや あやしき色の袍をとう

弁 延喜式第十四雑（ザウソメ）染色部赤白橡（キツルバミ）ハ櫨（ハジ）と茜（アカネ）とにて染て
ありとさらハ青白橡ハ苅安と紫とにて染らるゝ
とさらハとにかくに白橡といふ色ハ別ニ不見（ズ）赤きか青き
かといふを用ゐるにや天子の内宴（ナイエン）の時も今ハ赤色袍を
召雲客なとも色後時ハ用色紋なとハ無不見内宴ハ後の
赤色の袍ハ唐土綾にて花丸の浮紋ニ　弁　後褁要にも見え
又一条前関白返状永正元年三廿五日白橡之名称ハ多
猶不審ニ候其赤色青色の事ハけれハ名目ニ候
又白藍なとといふ色も儀式にも見え何色より出ることも
也あるは白赤色通用之橡と見へ候別ニ不見染色
之色橡不及了簡也以上下官一条冬良卿事也今後
入之　私云　下官とハ三条の逍遥院殿也一禅ハ号禅中
条家也

河海 はるさるハさみしく人をまちてとなむいひつかハしける夜
明くれはまた橡（ツルバミキヌ）衣ハ四位以上衣也主殿寮人ハ橡ハ上﨟（ラウ）乃
装束（キウ）也紀らるれとも此衣装束はかりとの人を称するとを
なけくねハ装束き（キ）おほゆるやうにあるや又云
はるかなる人衣服ハもちいるへきとゆへにあらはるゝ事
つるもの此衣あをむきもてといひかけし花この夕の郎
はるかなる人の中も衣服にせたる我にのへかたも見えさるさぬ
相接之略之

せんのみつからもすゑのかたを見たてまつりて　案ひんつるに
なるきさ井に又冠者（クワンシヤ）ともいひてまかりてあるかさや
弁 閑舞童（トウブ）乃事にや冠者にもありけるにさらに一前ひとへるを
又冠者とかひてなるへき続（ヲサナ）奉乃家（ヤク）と云へる也
河 舞童と称ある

尤しうき物とまことに僧のうにまひつてよみちれ侍まうくうる
御と目れくるくもいと打しおもあり　花　小楽とも也　細同
楽所あるとゝおとろかしさせせぬ人の詩何をひきしまて
て　花　楽屋乃内にて及せぬるや左まハ左披毬（コニヤウ）穀とも
らし乱声（ランジヤウ）あるとあまたは楽とろくしきとあり
あはれさ乃清すともめすまのくせらせちうのる様とんこせん
まこれ清てもくをさらゆれ　あはれされ清すとも
弄　楽のをあつかるものゝ也　細　楽器（ガクキ）とあつかる女房也女司（ツカサ）
乃蔵書（ツニヨ）也　河　蔵書寮なるや旧記（キウキ）云書司（ナニヨニ）女官乃右楽器
えやかしたり累代（ルイタイ）乃楽器を納（ヲサメ）置所也　花　清紀延
喜八年節（セチ）会（ヱ）雅（ウタ）楽（リヤウ）寮立楽設石和琴　宇陀法師　唱哥　玄司
撤却庭奉定之
うへの御らしの物ゝぬこゝ名也　弄　和琴乃名物也　和　和琴也

名也　孤　宇多法師和琴乃名也桐壺乃御時の名物也
細　和琴也
朱雀院ハいともめつらしくも哀にきこしめし　弄　桐壺の帝は
朱雀院へ行幸有し時も宇多法師乃名を聞召給
ひしやうとの和琴は昔もそのまゝにかはらぬと文法への居
るをとおほしめしけるにや
秋とて時ゆめるゝ里人もさらにみちれ打つるとてたてまつるをみる
細　朱雀院の法皇位の時ちかうも侍るハ名のなくとや
さらに清遠懐のんあり　孤　朱雀古ある里人とは自身
をも清遠懐あるへし　弄　朱雀院は自身かすかりある里人とも
朱雀院の早下此法洞やかゝ此目ちの打かへまて侍
らんせぬとも
よしあしをみそ知ゆしあるや　弄　朱雀院の居代乃時へつる也

なかりの事ハあかりしと法皇御所の御ことなり　河　愴恨（ウラメシキ）遊仙窟
朱雀院我御代よりも後の事なれとも御物かたりありし也
みると
よの中ハおもしろきやうなる古風をあめしに当座乃御ことをも
宗　法ハ過ぎし朱雀院ハ大方よ御覧ありし也
我御代の事をもさためしに對して古風をとハいへるなり
とふ代をと須め給ひてよきほとの事也　細　ほのかにしきさ
すみちに河しけしや也　孟　法皇朱雀院の御代をとためしに
ひときあるをとりのことなれともよの中のよひしぬるとくいふ
御むかしのひハ御殿也
世御のしおしき給　河　冷泉院法皇（ミ）歎（ナ）乃んき
けうよく御ひとつの御うしろ給ひて　宗　冷泉院の御ことなり
そうくひとの御ものとて見るときも給はすとこ　細　源とうらへとひとつ御

とみて給へり　宗　源と法師の上くはしき給ひとや
中納言なとかひ給ふことくまうしねてそめさきのかなれ
宗　夕霧をも今給人ハ三人とまにもとかまのとあさきまよさとや
弄　源と源氏の御給へるに又夕霧をもおもひやられハ須め
あるんすてめさましき心こゝろ　細　夕霧も昔も又源
又よく御給ふとやめさましとハ覚えとも須めたらん也
はてに我そてそれ法をもひやとひさのしにおそろしきらん
宗　法の御形ハきひあらしまや我も一人ちすると也
あさやうにかゝりしさところきそひくさんとも　孟　夕霧也
見えり
御法とまつり給ひことおもしろし　宗　夕霧の御事也
法のの度上人にまうしに法かつ城あるに　宗　唱（ニヤウ）言也
弁お将ハて急きく給ふると　宗　内府の御ことをもうしたる人也

あとよろへさしにこそ世を見んと思ふる所あるへしひとつあり

（朱）内府と源氏の御中よき様にとくひ見えたるなと也